らき☆すた　～変わった僕の日常～

零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
らき☆すた　～変わった僕の日常～

【Ｎコード】
Ｎ９２８６Ｎ

【作者名】
零

【あらすじ】
私立陵桜学園二年生に進級した『主人公』は、ある少女達の出会いによって、変わった日常を送ることになった。

始まり（前書き）

小説初心者ですがよろしくお願いします。

始まり

埼玉県に位置する『私立陵桜学園』。学年１３クラスというマンモス校。
その１３クラス内に僕が存在していた。

僕は入学して一年間。何ら変わらない学園生活に飽きる気分もないまま普通に感慨なく過ごしていた。
部活に興味があるわけでもなく、友達がいるわけでもなし。ほのぼのとした学園生活に黄昏て居た。

だが僕が送る普通に見れば、その生活は他の人にとって寂しく退屈な生活に見えただろう。

そして、僕が二年生に進級するさい、ふとした見知らぬ少女達の出会いによって、僕の学園生活はだんだんと変化をしてゆく。

始まり（後書き）

意見、助言がありましたらよろしくお願いします。

登場人物紹介（前書き）

オリキャラ紹介です。
更新ですが、最低でも1週間に一回は更新していきたいと思っていますが、更新が何週間か遅れるときもありうるので、その辺はよろしくお願いします。

登場人物紹介

名前：『神沢　嘉音』
読み：かみざわ　かのん

身長：１６６ｃｍ
体重：４９ｋｇ
一人称：僕

詳細

髪型は全体的に長くて、前髪が口元まであり、横髪と後ろ髪は肩まであり、ストレート。
目が深紅で暗い色をしている。
性格は普段は温厚で物静かで、厄介ごとが大嫌いで、状況によって卑劣。友達を作るのが苦手。
暴言を普通に使い、結構突っ込み所満載の呆け役。
家族は既に『死亡』しており、嘉音は一人暮らしだが、遠くの親戚に妹が居る。
特に家族に対した寂しい感覚はない。
生まれ付き『強靭な身体』で、骨が鋼鉄の様に硬く、皮膚はゴムの様に衝撃を吸収するという体質の持ち主。
腕力や握力、脚力が恐ろしいほど高く、鉄骨を一撃で砕く事ができるほど。
何故そのように生まれたかは、本人も知らないが、自分は『改造人間』だと思っているらしい。
体格は、細くも太くもなく、普通。
結構な美少年で、モテるが、声を掛けられない雰囲気の持ち主なため、ほとんどの人間が近づかない。

恋愛感情には、結構鈍感。羞恥心崩壊。
人のやる事に対して、口を挟んだり止めようとしたりせず、一言言って後は放棄する『傍観者』タイプ。
学力は普通。戦闘時においてそれなりの知識を持っている。
二年前からの記憶はない（ただし日常不可欠な事や僅かな事は別）。

登場人物紹介（後書き）

結構、むちゃくちゃな設定ですが、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

プロローグです。頑張って書きましたので、楽しんでいただけると幸いです。

プロローグ

プロローグ

４月８日。何曜日かは知らん。

今日は陵桜学園の始業式だった。

学園の風景に咲いた桜の花弁が思いっ切り撒き散らされ、空と地面を埋め尽くしていた。

それだけで、田舎の風景はとても豊かで平和に見えた。

地面に咲いた、蒲公英（たんぽぽ）の花が、黄色くあざやいている。

空は雲が、もくもくと広がり、春らしい空で、吹く風には、春の匂いが混ざっていた。

そんな、風景の一角にある、樹齢推測２０００年経つと思われる巨木に僕は存在した。

何よりも大きく咲いた桜の花弁が僕の肩や頭に載る。

地面はこの桜の花弁によって、埋め尽くされ桜色の地面となっていた。

「もう二年目か」

陵桜入学して二年目。

一年目は、何の感慨もなく友達も居なく、ただ単に普通に過ごしてきた。

僕の名前は『神沢嘉音』だ。

現在1人暮らしで、親はなんだか知らんうちに死んだ。

家族言えば、妹がいるがどっか違う地方で暮らしてるんだろう。

もう3年も声も聞いていないし顔も見ていない。

既に忘れたし、もう興味は無いし、思い出そうとも思わない。

ただ鬱陶しい。それだけだ。

さてと、そんなふざけた感情に浸っている場合でもない。

僕は、桜の木下からクラス分けの掲示板へ直行する。

僕がこの学校に来たのは、1時間前だった。

何故そんな時間帯に起きて此処に着たかといえば、時計が1時間くらい早くなっており、指した時間が8時20分だったため、全力疾走できたのだが、携帯を見てみると『7時27分』と表示されており、僕は早く起きたことを悔やんだ。

そして、この桜の木下で黄昏た。

黄昏時間、1時間。長！

僕ってこんなに呆けている時間帯が長いのか！？ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーと内心で自分に突っ込む存在がそこにはあった。

僕は、人と喋るのは苦手だし、敬語は使いにくいし、厄介ごとは嫌

いだし、人が死んでも『ふーん』としか思えないし、要するに僕は『壊れている』というところなのだ。

どうでもいいが。

さて、クラス分けの掲示板前まで来たのはいいが、人ごみが多くて掲示板が結構遠くにある。
見えねえ。つうか、人ごみ煩躁（うぜえ）。

と考えても仕方が無い。
無理やり入って見るか。

人ごみに入り、人の間を掻き分けるように抜ける。

怪力使えば普通に掲示板までいけるのだが、流石に皆からいやな目で見られるのは面倒なのでよしておく。
別にいやな目で見られたところで、何かが変わるわけでもない。

僕の周りで何かが変わるのは、これから一生無いと思うが・・・・・・・・・・・・・・・・・・

兎も角、僕はクラス分けを見なければ成らないのだが、人ごみで身が詰まる。潰される。圧迫される。
体が横に体制を崩した。

「とっとっ」

体の重心を変え、体勢を立ち直す。

その後このようなことが何回か会った後漸く、掲示板で自分の名を

探し当てた。

「Ｂ組か。ぼくＢって字嫌いなんだけどなぁ」

理由は無いけど――――――と自分勝手なことをほざく僕。

まあ、いいや。

昇降口を入り、教室へと向かった。

――――――――――――――――教室前。

この扉が今回の学園生活二年目の教室だった。

とくに、【何かが始まるー】的な感じはさらさら無いので、僕は教室の扉に手を掛け開けた。

その瞬間、どん――――――と誰かが体にぶつかった。

「っと、悪い」

誤りながらぶつかった奴を見た。

小さな女の子だった。

身長は推測１４０ｃｍ代、青髪の長髪ストレートで、頭の天辺からアホ毛が飛び出している。

いや生えているといえるのだろうか？

どっちにしろ、『くせっ毛』に間違いは無い。

そして何より一番最初に思ったのが

「（ちっさ！）」

だ。

その矮躯な体は、見るからに小学生並みの背丈で、僕より２０ｃｍ近くの差がある。

「とと、大丈夫だよ！・・・・・・・・は！これフラグ立ってるね」

立ってねえよ。ぶつかっただけじゃん。

「と、こんなことしている場合じゃなかったんだった。じゃ！また後でー」

そう僕に言うと少女はどこかに走り去って行った。

廊下を走るなよ。

「『フラグ』ねぇ」

ずいぶん久し振りな言葉だな。

さっきのことを特に気にすることなく、教室に入り自分の席へ座った。

『神沢』って名前もあって、僕は結構いいポジション席を獲得していた。

席替えのときはどの位置になるかなぁ・・・・・・・・・・

などと、惚けた感覚に浸り、朝のＨＲまでの時間を惚けて過ごした。

暫くしてチャイムが鳴るのだが、担任教師がまだ現れなかった。

ああ寝坊したなーーーーーーーと僕は考える。

3分ほど経つころには、クラスの中はざわつき始め五月蠅くなっていた。

5分経つころに、廊下から全力疾走で走っている音が聞こえた。

バタン！ーーーーーーーーーと教室の前のドアが勢いよく開く。

「はあはあ。間に合った〜」

「アウトだろ」

迷わず言う。

「うちが担任の黒井や、みんな学年も上がったことやし休み気分で居らんで頑張るようにっ！」

説得力ねえ！確りしろよ！

僕が思うに、説得力のなさはこのクラスの生徒ほぼ全員が思った事ではないのだろうか？

それは勿論身だしなみによって生じるもので、先生の髪はぼさぼさで、廊下を走ってきたうえ、遅刻寸前だったため、僕らに『説得力が無い』と言われても、おかしくはない。

その後、体育館へ移動し、校長の長い話を心行くまで聞き流し、その間『今日は何をして暇をつぶそうかなぁ』などと、考えながら過ごした。

担任のこと黒井先生だが、遅刻に居眠りに対して体罰禁止のこのご時世で、普通に拳骨を食らわすと言う鬼教員だが、馴染み易いのこ

とらしい。

僕はああいうのは、少し五月蠅くて苦手だな・・・・・・・友達作るのも苦手だけど・・・・・・・・

教室へ戻った後、委員長やらなにやら決めて、何事もテキパキ進み『残り時間で親睦を深めときぃ』と言った去った。

放置っつうか、適当にやっていると言うか・・・・・・・・・・・・

多分あの人昔もああだったんだろうなぁ――――――と僕は考える。

親睦を深めるとは言うものの、僕は友達を作るのが苦手だし、故に友達は居ない。

だが――――――

「今朝はごめんねー」

――――――話しかけてくる奴が居た。

今朝の青髪の少女だ。

「別に。僕は気にしてないから」

――――――と、取り合えず僕は素っ気無く言うのだった。

「紹介が遅れたねー。わたしは泉こなたって言うんだ」

「僕は『神沢　嘉音』」

この矮躯な少女の名前は『泉こなた』と言うらしい。

普通の名前だな。

「いやー入学式早々から、フラグが立つとは思いもよらなかったよー」

「そんなもん、僕は立てた覚えはねえよ。ギャルゲじゃあるまいし」

因みに僕は『オタク』という、情熱的な人間ではない。

「つーか、お前ってゲーム好き？」

「そだよ。アニメに同人フィギュアにエロゲもやるよ」

予想通り。こいつはオタクだ。

「因みにわたしのことは、こなたでいいよ。そのほうが親しみやすいでしょ？」

いや、そのにやけた顔には親近感のかけらもねえよ！むしろ悪意が混ざってんじゃねえか！？邪なこと考えてんのか！？

邪念が篭ってる！

「僕の事は好きな風に呼んでくれ」ーーーーーーーーと取り合えず僕も言ってみる。

「じゃあ、嘉音君」

即答！？

多分こいつと、付き合っている間に、いらん無駄な時間が過ぎて気がついたら壹年終わってたりしそうだった。

「ねえ、一つ質問してもいいかな？」

「ああ」
「過去に私と会ったことある？」
「？何で僕にそう訊く？」
「なんか、『会った事がある』って感じがするんだけど・・・・・気のせいかな？」
「気のせいだろ。僕はお前のような奴に会った事も無いし、昔のことであれば覚えてないから」

大体僕、忘れっぽいし大体容易い事であれば3日で忘れるし・・・・・・・・・・昔のことに興味は無いし。

忘れているし。

「まあ、いいんじゃないの？僕は過去に誰かに会ったかなんて思い出したところで『何かが変わる』訳でもないだろ」

人1人を殺したところで世界は何も動かないように、過去のことを知った後で世界に何か起こるわけでもない。

要するに僕にとって過去はただの廃棄物だし、鬱陶しい人生の邪魔者でしか無い。

さてと、連想したところで、僕は帰るためスクールバッグを持ち席から立つ。

「ちょちょ、何処行くの！？」
「どこって、家に帰るに決まってるじゃないか」

何言ってんだこいつ？

「じゃあ、ちょっと待って私も荷物とって来るから」

「じゃあ、僕は外で待ってるよ」

そう言って彼女は、自分の荷物をとりに行き、僕はスクールバッグを肩に担ぎ、教室から出た。

教室内で待っているより、外に居たほうが好きだ。

というより、何故僕は彼女の荷物を取りに行く間待っていなければ成らないんだ？

僕って何かした？

「おまたせー」

そういって、こなたは鞄を持って現れた。

序に後ろに2人居た。

「どちらさま？」

僕がそう問うと「私の友達だよー」とこなたは答えた。

1人が、リボンをカチューシャ風に纏めているライトパープルの髪色にショートヘアの髪型。

1人が、かなり癖のあるピンク色？の髪色にロングヘアのプロポーションのいい、秀才系の大人びた人だった。

「こなちゃん。誰？」
「泉さん、そちらの方は？」
そう後ろの二人が喋った。

「ああ、紹介するよ。えっと・・・・・・なんだっけ？」
忘れられていた。もしかするとわざとなのかも知れないが、マジで忘れているようだったので、僕は再び自己紹介することにした。
「初めまして、見知らぬお二人さん。僕は『神沢　嘉音』っていうよ」
こなたの代わりに僕は、そういった。
「あ、そうだそうだ。神沢君だった」
やっと思い出したらしく（と言うよりも聞いて思い出したようだ）、胸の前で相槌を打った。
「へえ、嘉音っていうんだ。あ、私は『柊つかさ』っていうんだよ。よろしくねー」
リボンをカチューシャ風に纏めている少女が言った。
いや、少女じゃなくて『つかさ』だ。
僕は答えるように、つかさと握手した。ふむ。女の子と握手するのは初めてに思える。

「はじめまして。『高良みゆき』と申します」

うわ、この人敬語使いだ。僕敬語苦手なんだけどなぁ。嫌いではないんだけど・・・・・・

つかさと同じように僕は『みゆき』と握手を交わした。そうしていると――――――――

「おーい」

――――――――――――後ろから声が飛んできた。

振り向くとそこには、ツインテールの少女がこちらに走ってきていた。

「ん、誰？」

ツインテールの少女が先に言ったのは、そんな言葉だった。

「こなた？こいつ誰？」

僕は、そいつに話しかける前に、こなたに問うた。

「あ、まだ紹介していなかったね。こちらは、超ツンデレ、つり目で寂しがり屋の――――――」

「うるせえ。普通に言え」

こなたの言葉を遮断する。

その言葉に少し不満そうな顔をしてからこなたは言い直して言った。

「私の友達の『かがみ』だよ『柊かがみ』」
「ふーん、柊ってことは『つかさ』と双子ってことか？」
「ええそうよ」

ふーん。結構素っ気無い言葉を使うんだな。僕には関係ないだろうけど。

「僕の名前は『神沢嘉音』。よろしく」
「さっきも紹介されたと思うけど『柊かがみ』よ。よろしく」
僕はかがみに手を差し出すが、握手はしてくれなかった。ツンだこいつ。

「じゃ、5人揃ったことだし、帰ろう」
こなたがそう言って先頭を歩いた。

「ん？五人？」
「どうかしたの？嘉音君？」
「僕も入っているの？」
「あったりまえじゃん」
肯定された。

「だって、『友達』だもん」

こうして僕に始めて友達が出来るのだった。

プロローグ（後書き）

次の更新は何時になるかわかりません

壱話（前書き）

やっと更新です。
待ってた人待ってない人も読んでいってください。
結構勝手に書きすぎた気がします・・・・

壱話

僕が彼女らと知り合って早数週間が経過した。
だが、僕の場合数週間してもいまだに友達というものに慣れておらず、接し方としてまあ、自分なり的な感じでやろうと思うこのころだった。

なかなか、友達というものは難しい。というほどの類ではないがしかし、友達経験のない僕にとってどう接したらいいか迷っていた。

気になることは、女子友達に囲まれる僕は男子生徒から痛い目で眼光を向けられることになった事だった。
単に囲まれているだけなのに、何であんな目を向けられるか、僕の心の中ではさっぱりわかったものではない。

これも友達経験の少ない証拠なのだろうか？
喧嘩したり笑いあったり泣きあったり感動しあったりと、『あったり』と言う経験が僕にはない。

『あったかも知れない』という解釈がちょうどいい。

そして今現在。昼食である。

普通であれば、こなたたちと飯を食うようになっていたのだが、今日はそれを放棄し前みたいに一人で食べて見ようと思いダッシュでここまできた。

僕は、基本的に学食を利用するので弁当などの類は、よほど暇でなければやらない。

財布の札や小銭が日に日に減少してゆくが、特に貯金のこともあるので心配は無用である。一応、バイトもしている。

今日は何を食おうかと思いながら、メニュー覧を除く。
特に美食家でも、貧乏舌でもない僕は特に好き嫌いなく、食べれる。

生徒が多いここ陵桜学園には全部で3つの食堂があり、その中でも一番評判が良いのは、東館3階にある『東食堂(あずま)』で、主に3年生や暇を持て余している生徒が来る食堂である。
そして、授業を無断欠席した不良生徒が好んでくる場所でもある。

ラーメンや饂飩(うどん)類などが、ここでは多く食べられるが、生憎僕は麺類が好きではないし、ほかにも煮魚定食などもあるが、今それを食いたい気分ではない。

「というわけで却下」
そう頷きながら丼コーナーへ移動する。

そして、メニュー欄を見る。
あ、牛丼が吉野家より高い・・・・・

丼といえば、親子丼や牛丼などが定番だが、この前掲示板で『キムチ丼』という、僕にとって前代未聞の丼が出たということを知ったのだ。
食べてみようと思いここまで足を運んだのだ。
キムチといえば、白菜などを辛い何かにつけて漬物みたいにするのだが、『砂糖漬け』というものもあるらしく、いまだにお目にかかったことはない。

そして、僕はその『キムチ丼』を食べるのではなく――――――

「すいませーん、キムチ丼ひとつご飯抜きで」

ーーーーーーーーーーと注文した。

食堂のおばあちゃんは不思議な顔を浮かべ、「それじゃただのキムチじゃよ？」と言った。

そういうものの、注文どおりのものを出してくれた。

代金を支払って僕は賑わった食堂内を見渡し、わずかに残った二人用の席を見つけると、そこに座る。

そして、賑わっているにかかわらず手を合わせて「いただきます」といって、箸をとると気が付いたことがあった。

「そういえば、キムチ食べるんだから水を持ってこないと」

何せ相手は、辛いものだ。水と言うものがなければ続けて食べ続けることができない。

そう思い箸を置いて、席を立つ。

自動冷水機などという類のものはこの食堂にはないので、何か飲み物を自動販売機等で購入しなければならない。

僕は、自動販売機で水を買うと、席は一直線に戻った。

再び、箸を取り手を合わせ「いただきます」をした。

一口目。

キムチを口に放る。

・・・・・・。

これは・・・・・・・・・・相当キツイ。なんてものを注文したのだろうか。

いや、これほどの辛さだとは予想外だ。

僕としてはもう少し辛さが控えめだと思っていたのだが、よく見てみるとこのキムチ赤い汁がたっぷり付いている。

あのおばちゃんの嫌がらせ？と考えるのはあまりにも勝手すぎる。

「っつうか因果応変？」

それからは、黙々と箸を進めた。あまり独り言は多くては変なやつだと思われてしまう。

・・・・・・。

さて、そろそろ限界が来たのだろうか？

水を飲むもののキムチには無効化らしく治まるどころか一口食べるたびに痺れが出てきた。

舌どころか頭にまで痺れが進行したらしく、いった僕は何でキムチを食べているのか？そういえばキムチって何だっけ？何だっけ？ってどういう意味だっけ？、そもそも意味って何だっけ？

とそんなことも分らなくなって来た頃だったが、僕は水を飲んで脳を正気に戻す。

その後何とかキムチを食べ終わると、舌の酷い痺れを我慢しながら、

食堂を後にした。
『東食堂(あずま)』を、出て屋上へ向かう。
まだ、昼の授業には余裕があるので、屋上のベンチでスモーキングという古臭いことでもしようかと、階段を上る。

屋上のドアを開る。

そこには静けさと街景色が、手摺の向こうに見えた。
青い空が広がり、今が散り終わっていない桜が宙に飛び描いている。
空を見上げれば、青い空間と白い雲がぽつぽつとあった。

「あー舌いてえ・・・・・」

だがそんな観想に浸っている間もなく、舌の痺れが一段と思考を邪魔していた。
多分この調子では、3日間くらいまともに数多の味を楽しめなさそうだ。

スモーキングをやめ、教室に戻る。

その後、午後の授業を受け、放課後。

「嘉音君帰ろー！」
早速こなたが僕を誘う。

「わかった」
そう答えて僕は、席を立ち、スクールバッグに教科書類を入れると持つ。

「あれ？ほかの奴は？」
「みんな用事あるって帰ったよ」
「あっそ」
教室を出て昇降口へ行き、上履きと靴を履き替える。
「そういえば、嘉音君？」
「んだよ？」
「今日、チョココロネ食べてたら気に成ったんだけどさあ」
どうやらどうでもよさそうな話だ。まあ、友達という関係だし聞いて見るか。
「チョココロネの頭ってどっちだと思う？」
うん、すんげえまるっきりどうでも良い話だ。予想があってた。
「さあ、っつうか、そんなもん如何でも良いじゃねえか。細いほうが頭にしろ太いほうが頭にしろ、そんなもの食い物だろ？人に訊くんじゃなくて、調べてみたら良いじゃねえか」
我ながら冷たい接し方をするが、何時もの事でみんなは全く気にしてない様子だった。
「まあ、僕の考えとしては、食べやすいほうを前提として細いほうかな」
よく考えてみると太いほうが頭になるとなんだか変な感じがする。
そもそも、太いほうが頭だったら、これを作った人はさぞ異様なパン職人だったのだろう。

というよりも、何が元でこのような形になったのだろうか？

形としては・・・・・・・

「さっきから何考え込んでいるの？」

「・・・・・・なんでもねェよ」

僕の思考は、たまに奥深く考え込むときがあり、そのときに応じてほかの回想へ移ったりする。というなんとも暢気な癖があった。

昇降口を出るとバス停までの道のりを歩く。

「じゃあね！神沢君！」

違う方面らしき見知らぬ女子生徒が、僕に手を振ってくる。

「ああ」

そういって、軽く手を振る。見知らぬ生徒に・・・・・・

「へー」

「んだよ？」

「嘉音君って意外にモテるんだねぇ」

ニマーとにやけるこなたは、僕を嫌味で見るような顔で言ってきた。

「はあ？何言ってんだお前？モテる？僕がか？っつうか意味わかんねえよ！っつうかその嫌味な顔をやめろ！ウゼエよ！煩躁（うぜえ）！」

僕はモテていると言う自覚がねえんだよ！ーーーーーーーーーーーーーーーと僕はいつの間にか猛反発していた。

「そこまで言わなくても・・・・・」

呆れ半分顔のこなたがそこにはあった。

「というか、何でそこまで猛反発するの？」

「わからん。僕にはとにかくモテると言う感覚が大嫌いらしい」

らしいというのは、自分でも分らないと言うことだ。

『モテている』と言う感覚は、普通の男子であれば喜ばしいことであるだろうが僕の場合感覚がずれているので、『好ましくない』と言う思考が勝手に動きそして猛反発するようだ。

自分のことは自分が一番知っていると言うが、　僕は自分のことがいまいちさっぱり分らない。

まあ、いいだろう。そう考えることでもない。

その後僕らは会話を交わし、バスに乗り駅まで行くと分かれた。

僕の場合、数十分歩いていけば、家まで着くので、電車と言うものを使わないですんでいる。

でもさすがに、家から陵桜までは遠いので、バスを使うようにしている。

「あ、そういえば冷蔵庫の中が空っぽなんだっけ？」

ふと僕は思い出し、食材を買うためひとまずそこら辺のＡＭＴでお金を下ろすとスーパーへ向かった。

ここ最近になって、新しくスーパーが出来上がったと言うことで僕はそこへ向かうことにした。

前は小さな八百屋や田舎的な場所で新鮮なものを求めて買ってきたので、スーパーと言う存在にはあまり世話になった覚えはない。というより、あまり好んでスーパーなどに行かないので、お世話になったと言うより、お世話にならないだ。

「久しぶりのスーパーにとうちゃーく」

などと言って、周りから一瞬変な目で見られたが、僕は気にせず籠を取って、彼是(あれこれ)籠に入れ、レジで会計を済ませた。

今日はバイトの日ではないのでこのまま家に帰るのが良いのだろう。街をうろついていると碌な奴にあった覚えはない。

そしてきょうも・・・・・・・・・

「手前、人にぶつかっておいて何も言う事がねえのかぁ？」

見事僕は、チンピラの野郎に、人ごみの中肩をぶつけただけで、こうなった訳である。

全く、一つ街を歩く程度でこの様だ。僕は不幸体質(トラブルメーカー)ではないと思っていたのに・・・・・・・・・

現在、人気のない（このシチュエーションは普通に見かけるな）場所に、連れて来られ、3人のチンピラ（この際、下種虫とでも呼ぼうか？）に囲まれている状況である。

一人は、金髪リーゼントのサングラス、一人は、顔の至る所にピアスを着けている（多分こいつ絶対学生の頃不良だな）奴で、一人は、ダンサーの様な音が異常なほど洩れているヘッドホンを掛け、ノリにノッている奴だった。

全員煩躁。

「言うことぉ？何でてめえ見てえな塵屑に言うことなんてねえよバーカ。アホか？鋏を眼に刺して死ね糞野郎！」
全くチンピラに動じず、言いたいことをハッキリ言った。

これが僕の言うことである。

しかし、チンピラ共の機嫌と言うものは短い。
僕は今の言葉に苛ついた奴に、殴られる羽目となった。いつものことだが・・・・・・

右の頬に痛みが走る。チンピラとはいえ僕より年上だ。それなりの力量がありそれは高校生よりも強いものだ。
でも、家が武術家であったり、空手などを習い鍛えられているものは例外だ。
そして誰にも負けたことがないと言う奴も例外だ。

しかし、僕にはそんな負けた事が無いと言う奴でもないし、武術を習っていたり、家柄がそうであったりでもない。

実家は、長年子孫を受け継いでやってきた家計で、特に大柄な会社を持っているわけでもなしで、特別な学者などがいるわけでもなし、武術家でもないわけで、何がある家系でもない。

僕の知らないうちに顔も声も知らない親は死んで、顔も声も知らない妹は違う地方の親戚で生きているだろうし、貯金に3億円入ってるとなれば、僕の親は何か特別な奴であっただろうに違いないか、それとも、妹が特別なのか・・・・・・・

気づけば僕は、襤褸襤褸で酷い有様だったが、全身に痛みは特になく買ってきた食材も潰れていなかった。
痛みはないものの、ずいぶんと疲れた感覚だった。

感覚麻痺のように体が感覚を感じていない。だが、今なおもチンピラは僕の体を壁に押し上げ殴り続けている。

それでも、僕は手を出さない。
僕が手を出せば必ず彼らは『ぐちゃぐちゃ』になるだろうし・・・・・・・・・・ただでは絶対に済まないだろう。

学生が問題を起こせば学校を退学になってしまうだろうし、せっかく出来た友達を失いたくない。

でも、僕はそこまで我慢強くはない。

そして再び拳が飛んでくる。僕の右手が自然に動き拳の軌道を止めた。

「な！？」

チンピラが驚く。

僕はなぜ驚いているか分らない。ただ、飛んできたただの拳をつかんだだけで何を驚いているんだ？

その拳を離すとチンピラは僕と距離をとる。

買い物袋を放し、戦闘体制に入る僕。

だが、構えるわけでもなくただ佇む。

武術家であれば、構え如何来ても対応できるようにするが、生憎僕にはそんな我流はないし、嫌いだ。

そして奴らにもそんな我流はないし、それほどの戦闘能力もない。

「――――――――――――――」と僕は何かを呟く。

僕から一歩踏み込む。その一歩は間合いを攻めるのだが、たった一歩の癖して奴ら目の前に潜り込んだ。

僕はその場でハイキックを繰り出し、一人の横腹を狙った。

そいつは、一瞬の判断かそれとも体が覚えているのか腕で横腹を守る。

だがそれは、全くの無意味だ。

奴の腕から、ミシと音を立て曲がる。

僕のハイキックは腕の骨を圧し折ったのだ。だから無意味なのだ。

そのまま、蹴りは奴を横に吹っ飛ばした。体が吹っ飛び頭を壁に激突して、崩れ落ち動かなくなった。

残りの二人のチンピラは後ずさりしていたが、一瞬の僕の動きで腕を掴まれ、一人は掴んだ腕を握り潰し通路のさらに暗いほうへ投げ飛ばし、その途中にあった鉄骨の積み上げに頭から激突して数ｍの落下した。そして動かなくなる。

もう片方で持っている奴を僕は、蹴り上げた。
肋骨を、的確に狙い蹴った。

ぼきんといって骨が外れる。

ドサッと呆気なく地面に落ちるチンピラ。
僕は容赦なく、落ちた体をサッカーボールのように蹴った。
蹴った場所は、肩だ。掬い上げる様にして蹴り上げた。肩の骨を完膚なきまでに粉砕し奴は電信柱に頭を打ち付け崩れ落ちた。

「・・」

そう何かを僕はぼやいて買い物袋の中身を確かめるとその場を後にした。
喋った内容はすぐに忘れた。

・・・・・・・・僕は、改造人間だ。

それは勝手な仮説だが、少なくともそう考えざるを得ない。

『骨が強靭に硬くて皮膚がゴムのように衝撃を吸収し、恐ろしいほどの怪力が使える』ので、そう仮説を立てたのだ。

だから、さっきのチンピラも楽に肩の骨や何やら、砕くことも出来たし投げ飛ばすことも出来た。

でも、力量はそれほど出していない。本気を出せば拳一発食らわせるだけで、与えた部位を抉る事も貫くことも出来るほど、力量が高い。

僕はそんな自分が怖い。自分のことが解らないほど怖い。

僕は普通じゃない。人間じゃない。でも、この世界に生まれた限り人間なのだろう。

そんなことを考えながら家に帰った。

壱話（後書き）

どうでしたか？意見感想助言大歓迎です。
キャラの言葉遣いって結構難しいです。
これからもぼちぼちやって行きたいと思います。
そして、更新は未定です。すいません

弐話（前書き）

更新です。
ぜひ読んでいってください。

弐話

僕に『女子友達』という、人生前代未聞が始まってから早・・・・・・？週間（忘れた）。

これといって僕の中に何かが感じられるとか、そういうものはなく、クラスのみんなから急に痛い目で見られるということがあった。

そのせいか、此処の数週間というものが長く感じられた。前はすぐに時間が流れたのに－－－－－－－と何か悔しくなった。

僕の住んでいる場所は、埼玉と東京の狭間にある結滞なアパートだった。

自室あり客間あり居間ありキッチンあり脱衣所あり風呂ありトイレありだが、狭いにかわりない。

古くもなければ新しいとも言えないが、建設されて十弐年になっていることは、アパートの住人である自称７６歳のお爺ちゃんに教えてもらった。

『此処がたってもう１２年かのう』

『へえ』

頭の中にそのときの会話が浮かぶ。

・・・・・・。

考えてみれば、自称７６歳とはいうものの、外見でいえばすでに８０越えているようにしか見えない。
あのお爺ちゃん絶対嘘ついているな。なるほど、あくまで自称か・・・・

さて、何日間かは忘れたというか知らないが（僕ってほんと何も知らないな・・・）、『ゴールデンウィーク』の最終日である。

もちろん、鬼先生（黒井先生）から宿題が出されたことはいうまでもなく、それをやらなければ何か補習でも受けることだろう。
さらに、補修は愚か休み明けは中間テストで、ゴールデンウィーク中は暢気に遊んでは居られないだろう。

僕は、運動が得意だが、勉強は得意でもなければすきでもない。
というよりも、嫌いだし面倒くさい。だが僕は、現実逃避手段として使う。

僕の学力は標準並だけれど、特に嫌いな教科も好きな教科もない。
一応何でも標準並にできると自負している。

苦労はしたことは一度もない。ただ、努力したけど。
努力は結果のための課程と誰かが言うが、まさにその通りだ。努力したところで、それは結果を出すための課程に過ぎない。

そのため現在。僕は勉学以外、苦労せず生きている。

というより、僕はなぜこんな風に論文的なを、回想しなければなら

ないのだろうか？

ともあれ、さっさと宿題を片付けて残りのゴールデンウィークをずっとごろごろしていよう。予定はないし、やることもない。

勉学は苦手とはいえ、特に授業で解らない所はないし、そういうのは結局人によるものだし、解らないと言うのは、授業中しっかり聞いていないやつのことを言うのだろう。

僕は、ちゃんと聞いているししっかりノートに書きとめているし、解らなければ教科書か先生に訊いたりしている。

でも、テストの点数はさほど良い物でもない。

７０点そこそこが僕の平均で、最高得点が８０点程度だ。まあ悪くもなければ、良くもない。

さっそく、スクールバッグから教科書やノートを取り出し、指定された宿題を解き始めようとするが、そのとき携帯が成った。

僕には、最近まで文明機器というものを所有していなかった。

特にこの携帯は、メールアドレス帳が僕には不要なので（というよりも電話する相手もいない）持っていなかった。

すべて家電話に、頼っていた。

あまり、僕はお金を使うことは苦手だし、不器用なので早々使いたくない。

あと、せいぜい今のままで過ごして行くのなら、余裕だし。どこかに引っ越すとなれば、まあそれなりは暮らしていける。

僕の貯金には、３億円という、莫大金が入っているが、一応僕の所

有権ではないのだが、しかし今僕が持っているということで所有権は僕にある。

さっきも言ったように僕はお金を使うのが苦手なので、3億円あろうと無駄遣いするのはよしておいている。

僕は携帯をとりコールする。

『やほー、嘉音君元気ー？』

名称厄介人（雰囲気的にそう名づけた）『こなた』からの電話だった。

この・・・・？週間で、彼女の大体のことには慣れた。

「僕は風邪も引いていないから取り敢えずは元気だよ。で？何か用？」

『今から、かがみの家に行って、勉強会をやるんだけど、嘉音君も来る？』

勉強会ねぇ・・・・・・・・・・

まあ、いいか。宿題も終わり掛けだがそこまで終わっているわけでもない。

丁度良い機会だし、この際お邪魔させて貰うとしよう。

「行くよ。でも、それって僕が行くことかがみに話してんの？」

『あー、私から言って置くから』

「あっそ。分かったよ」

『それよりも、嘉音君ってかがみの家って知ってるの？』

「いや、知らないけど・・・・・・」

そういえばどこなんだっけ?行ったことも聞いたこともなかったな・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「ここか・・・・・」

あの後かがみに電話して、場所を教えてもらうと、僕は必要最低限の物を持って電車でここまで来たのだった。

電話では「『鷲宮神社』と書かれている場所があるから」と言われて、その位置は知っていたので、電車で駅まで行きここまで歩いてきたのである。

家は裏側にあるようで、僕は一周して玄関まで回った。

「あー、普通・・・・」

家を見て一言目がそれだった。

そして何の躊躇いもなく、インターホンを押した。

暫くして玄関のドアが開き、そこからかがみの顔が現れる。

「入ってー」

そう言ってかがみが僕を手招きする。

言われるがままに僕は入り、靴を脱いでかがみの後に着いてゆく。

廊下を歩くうちにたくさんの部屋を見つけ、僕はそれを見回していた。

「広いな・・・この家」

正直そう思った。

「そう？」

とかがみが返してくる。

「僕の家より広いな・・・・3倍くらいある・・・・・」

「でも、私の家族は多いから結構狭く感じるのよ。姉が二人も居て喧嘩もしょっちゅうでさあ・・・・はあ」

かがみがため息をつく。

「そう・・・か」

正直少し羨ましかった。

家族が居ることに僕は羨ましかった。

僕には家族が居ない。それはまだかがみ達も知らないけど、何れ話す事だろうし、今は伏せておくとしよう。

僕にもああいう経験が昔はあったのだろう。でも、今の僕にはそれはただの廃棄物に過ぎないし、もし妹が居れば僕はそいつと家族として暮らしていたのかもしれない。

でも、その妹は何処に居るのかも、何処で何をやっているのかも分からない。
そして肝心な、妹の名前も知らない。

僕の記憶が覚えているのは、多分中学の頃は何も覚えていないだろうし、高校に入学今までの事だろう。
それ以前のことは、膨大な紙の中から目的の一文字を探し出すようなものだ。

名前と言えば、僕に本名が解らない。

記憶を忘れてはいるとはいえ、ある程度の生活に必要なものは全て覚えていた。
そして、その生活に必要なかった部類である名前。

現在僕の名前は『神沢嘉音』。

正式に僕がつけた名前ではないのだが、役所にはそう登録されていた。

記憶・・・きおく・・・・・・・・キオク

・・・・・・・。

記憶が忘れていると言うか・・・・・・『消されている』と言うか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

まあ、いいや。いちいち掘り返すものでもねえし、どうでもいいか。

名前だって只の記号だし・・・・・・・・・・・・・

「姉が二人ってことは、四姉妹か・・・・・・ふーん。四姉妹ねえ・・・・」

親も大変だろうに・・・・・

「あんた、家族は？」

早速、今の話から派生した話題が僕に帰ってきた。

それに対して僕はこう返した。

如何答えるべきだろうと、躊躇はない。

「死んだ？」

淡々と言った。疑問系を混ぜて・・・・

「は？」

呆然とするかがみ。

「僕は、今は一人暮らしなんだ。そして、その肝心な親は死んでいる。どういうわけか、『記憶』がないんだ。死んだのかなんて僕にも分からないし、そもそも、死んだかどうかも解らないし、顔も覚えては居ない。その家族だけど、どっかに妹が居ると思う・・・・・・・まあ、確証はないんだけどね。その妹も声も顔も覚えては居ないよ」

一応『記憶障害』なんだ。僕と付け足す。

「悪い事訊いちゃったかな？」

「別に・・・・・・・・・・僕には家族がいねェし、顔も声も覚えていい

ないからまあ気にすることでもねェよ」
そんな悲しそうな顔をするなよ。気分が悪いーーーーーーと僕。
かがみの部屋は二階にあった。
「部屋といえば、お前等の姉さん方は？」
「出掛けてるわ。ゴールデンウィークの終わりだしねえ・・・・」
あっそーーーーーと呟く僕。
かがみの部屋は意外に片付いていた。と言うよりも普通であったりなかったり。
本棚には『ラノベ』が並んでおり、結構巻数があった。
「小説がすきなのか？」
「まあね。あんまりじろじろ見ないでよ、恥ずかしいじゃない」
かがみが少し顔を赤くして言う。
「あっそ」
『じろじろ見ないでよ』ーーーーーーーーーーーーーーねェ。見るつもりなんてねえよ。３ｃｍもな・・・・・
「お菓子とか飲み物とか持ってくるから、そこら辺に座って先にやってて」
「わぁった」
部屋の中心といえる場所に机があり、僕はそのそばに座って勉強道

具を取ると、ノートやら教科書やら開き早速黙々と問題を解く。
すでに、現国や英語は終了寸前で数学だけがいまだに中途半端なところだった。

公式とか何とか・・・・・まあ、教科書とか見て解くしかなさそうなので、そうする。

数学の公式を解きながら僕は考え事をしていた。

考え事と言うか・・・・戯言と言うか・・・・・まあ、そんなかんじ。
特に気にすることでもないし、っつうか如何でもいい事。

「ふわ〜ぁぁぁ。。。。。。。」

欠伸が出た。

ふと、自分のノートを見る。
うわぁ。僕の字ってこんな風だったんだぁ。

下手糞でも上手くも無いが、機械で打ち込んだ様な字だった。

かっくんかっくん。角格文字。

くだらねェ。

自分の字がかっくんかっくんだからなんだよ・・・・・

スゲェ如何でもいい。

暫くして、かがみがお菓子やら飲み物やら持ってきて、最初に（さっきまで寝ていたらしき顔で）つかさ来て、次のこなたが来て、最後にみゆきが来た。

うわぁ。僕ってなんていう空間に居るのだろうか。だって僕以外全員女だぜ？

こんなこと早々無いのは世間的に知っている。

あ、なるほど。教室の男子生徒がいやな眼光を向けるのは僕がこんな風に囲まれているのが妬ましいと言うことか。

あれ？なんか違和感と言うか何か解らない。

確かに、男子にとって女子に囲まれることは両手に花だし、妬ましい理由もわかるが・・・・・・・・・・・・・・

それがどうした？

囲まれているときはいい気分だろうし、確かに楽しいだろうが。
何かが僕にはわからない。

解らないことが解らない。

何が解って解らないのかは解るが、その解らない理由が解らない。
そんな感覚が胸の中を駆け巡る。

・・・・・。

飽きた。この回想するのはもうやめよう。
頭(こうべ)が痛くなる。

感情が如何だとか、感覚があれだとか、一々面倒くさいと言うか呆れたと言うか・・・・・・・・本当に下らない下種な話だ。

まあ、欲がないと言うかそういう感覚がないと言う解釈で終わらせてしまおう。

さておき、勉強会に会話を持ち込もう。

「こなた。お前ってほんと。何にもやってねェな」

顔を上げた瞬間こなたのノートが目に入った。
ほぼ白紙のページが広げられていた。

「しかたないじゃん。忙しかったんだもん」

「ぜってェ嘘だろ？」
「嘘じゃないよ」
「ウルセェ」
「猜疑心（さいぎしん）が強いねー嘉音君は。でも、昔の人はよく言うじゃん。『信じる者は儲かる』って」
「それは漢字の覚え方だ。っていうか、最初っから信じてもいねェし、信じて儲かった覚えはねェ」

何か軽くネタバレしているような気がする・・・・・・でもあれってライトノベルだからこいつは知らねぇかな？
スゲェ長ぇし・・・・こいつあんなに読めないだろう・・・・・

「ないな・・・」
「なにが？」
「何でもない」

宿題をやっていないと言う点でつかさも同じだった。
ほぼ白紙。文字がちらほらある程度だった。

「それじゃあ、かがみノート見せて」
そう、微笑んでこなたは言った。

「めっちゃストレートね」
呆れ顔でかがみは言った。

「お前等、宿題写すのはいいけど、自分で確りやらないと自分の為にならないよ？ガッコの先生たち、結構説明確りしているようで足りてないから、ちゃんとやるといいよ？休み明けのテストでいい成績とらないと思うからさ」

僕は何気なく言ってみる。

「あーでも私は一夜漬けが得意だから、大丈夫。だから貸して」

「お前は少しは悩めよ！」

かがみが突っ込んだ。

結構五月蝿かった。キーンと耳に響いた。

「そういう、嘉音君はどうなの？」

「僕は一応、出来るほうでも出来ないほうでもないから、特に宿題に困った事はない」

でも、苦労するのには変わりは無いけどねーーーーーーーーと僕。

「っつうか、手前等ゴールデンウィーク中いったい何やってたんだよ？」

僕はつかさ、こなたに問いかけた。

「「えーと・・・・」」

思い思いに回想してくれ、そして話してくれた。

こなたは、僕の予想外以上にネトゲーで遊びまくっていた様で『殴っていいか？』といいたくなるほどだった。馬鹿だこいつ。

つかさは、計画を立てたのだろうが、見事そんな事全くやった事もないわけで、計画倒れになった。

まあ、人それぞれか。

僕はその後、教科書類を見ながら答え合わせや公式を解いたりして過ごし、こなたつかさ組は丸写し・・・・・。
縛や鏡やみゆきを除いてこの二人は勉強会と言うよりも、答え写しに来ただけと言う感覚になってきた。

まあ如何でもいいか。僕の知った事ではない。

現在時刻正午１２時００分丁度差し掛かったところだった。

体にある変化を感じた。詳細を言っておくと腹に変化があった。

「腹が減った」

基本的にかがみが持ってきたお茶やお菓子などには一切と手を付けておらず代わりに他の人が食べていた。
ちなみに僕は弁当などの類を持ってきていないし、弁当を買ってきてもいない。

「お弁当などは持ってきていないんですか？」
「まあ、午前中に帰ろうと思っていたから、そういうのは用意してないかな。みゆきは？」
「私は、午後にも続くと思いましてちゃんと買ってきたんですよ？」
「あっそ」

みゆきが買って来たと言うのなら、僕も買ってくるとしようか・・・
・作ってもらうわけにも行かないだろうし・・・・・

僕は立ち上がる。

「どこいくの？」

つかさが問いかけてくる。

「ちょっとそこまで。弁当買って来ると言うか食べてくるよ。一々人の家で飯食うなんて見っとも無いと言うか、少し遠慮が無いからね」

僕もそこまで遠慮の無い奴じゃないからね――――――と僕は言った。

「あー、ならつかさ。あんた作ってあげたら？」

かがみが何気なく言った。

「ふえっ！？」

「（笛？）」

そのままかがみは続けていった。

「あんた、料理得意でしょ？だったら何か軽いものくらい作ってあげなよ」

「で、でも・・・・」

つかさが戸惑う。

仕方ない事だろう。見ず知らずの男の子に料理をすると言うことはさらさらあったものではない。

ましてや僕のような無表情な顔しかしない奴に・・・・・・

「いいって別に。単に買ってこればいいだけの話だ。一々作らなくてもいいよ。僕なんかのためにさ・・・・」

一々作るの面倒くさいだろ？と僕は付け足す。

「でも、あんたここら辺に何があるか知らないでしょ？」

「まあ、そうだけど・・・・」

僕は見慣れない地域をうろついて迷子になるほど、愚か者ではない。となると、買ってくるのに一時間を要したりする可能性がある。

僕はその後１０分かけて彼是考えたが、結局作ってもらう事になった。

そして今になって思う。

「（遠慮せず作ってもらえばよかったなぁ）」

と。

みゆきとこなたは弁当だったので今現在目の前で食べていた。

金持ちかどうかは知らないのだが、みゆきの弁当は結構豪華だった。

玉子焼きの中に鰻が入っていると言う、珍しい料理が入っていた。

うーん。僕はああいうものは作った事がないなぁ。

中々鰻なんて食べないし・・・・そもそも、鰻を食べた覚えがない。

調理法としては、蒲焼が良いと良く聞くが、他の料理法は僕は聞いたことがない。

というよりも、最近は魚料理を食べた覚えがない。

「神沢さんは、何が好きなんですか？」
みゆきが僕に徐に話しかけてきた。

「食べ物で？」
「はい」

好きな食べ物・・・・・・といわれても特になかったり。

「んー、ないかなぁ・・・・美食家でも貧乏舌でもないから、好き嫌いはないよ」

いつかキムチを丼いっぱい食ってひーひー言っていたけど・・・・・
あれはもう二度としないと心に決めた。

あれを食べて3週間ほど味覚が碌に働かなかったため、何処へ言っても美味しい物が食べれなかった。
不幸だった・・・・・

因果応変だった。

でも、僕はそんな変な困難を乗り越えている。

「ねえねえ、嘉音君」
「なに？こなた？」
「嘉音君って、料理できるの？」
そういいながら、スゲェ嫌な顔して言ってきた。非常に鬱陶しい。
馬鹿にしてんのか？

「まあ、できるけど・・・・・。どうかしたか？」

「いやー、嘉音君て結構ずぼらに見えるからさぁ・・・・・・・・。」

人から見たら僕はそんなに嘆かわしい奴だったのか・・・。

まあ、交流関係がなかった僕にしてみればそう言われても仕方がない・・・か。

「これでも僕は、一応一通りのことはできるよ？こんなナリでも・・・・・」

「おお、すごく意外・・・・・」

どういう意味でだよ・・・・・・・・・・

「やっぱり僕って外見が表に出ているのかな？」

「その通り！」

肯定された。他人に・・・・・・

僕のことを一切これっぽっちも知っていなさそうな人間に肯定された・・・・・・・・・・・結構ダメージが大きい。

まあ、仕方ない事だとしておこう。深くは考えまい。

その後漸くして、料理ができたらしく、僕は腹の空腹を納めるためかがみの部屋を出た。

昼飯は、焼きそばだった。

麺類は好きではなかったのだが、まあ折角作ってくれたものに対して不満を言うわけには行かない。

「じゃあ、いただきます」
箸を取り麺をすする。
おお、美味い。普通且つ何処にでもありそうなほど美味い。
若しかしたら、屋台とか売ってるのよりかは断然美味いのかもしれない。
「ど、どうかな？」
「美味いよ。やっぱり手作りは違うな・・・・」
そもそも、麺類がここまで美味しい物だとは思わなかった。
世界は広い！ーーーーーーーーーーーーと僕は改めて感じるのだった
僕はその後早めに昼食を食べ（いつの間にか他に二人も食べていた）、その後宿題を終わらせた。
「終わったー！」
こなたが床に転がった。
現在、４時２０分。
昼食が食べ終わったのが、１２時４６分だった為、勉強を始めたのは１時だった。
そして、黙々と総計３時間２０分かけて宿題を終わらせたのだった。
「つーか、お前。普段からちゃんとやってれば、もっと早く終わっ

たんじゃねえの？」

『人は普段から努力するのが一番です』ーーーーーーーーーーーーーーーといえるほど、僕は努力をした事は・・・・あったな。

たったの一年前だけど・・・・・・・・・・・・・・・・

まあ、性格が性格だ。駄目な奴はまるっきり最初っから駄目な奴だし、それは努力次第で直るものでもなさそうであろう。

「つかさもだぜ？」
「えっ！？」
「計画ってても お前、立てた事あんまりねぇだろ？慣れない事はしないで、かがみと一緒にやるとか、やりやすい方法をみつけた方が良いよ？」
「はうぅ〜・・・」
がっくりするつかさ。

ガックリしてもらっても困るのだが・・・・・・

「ねえ、嘉音君って『英語』が得意なの？」
僕のノートを取ってみていたかがみが僕に言う。

「別に『得意』ってほどのものじゃないよ。将来のことを考えて、ただそれに集中勉強しているって感じかな」
「何か成りたいものでもあるの？」
「ねえな」

将来に必要かな？と思いやっているだけで将来成りたいものなどこ

れ一欠けらもない。

「将来の夢・・・・・・ねえ。馬鹿馬鹿しい」

一人僕はぼやく。

机の上にあるお菓子を摘んで食べる。スナック菓子のなんかだった。

というより、かがみはよくまあお菓子をパクパクと食べるものだ。

それに気が付いたのか、こなたが

「かがみん、そんなに食べたら腹(ココ)が成長するよー？」

といった。

その瞬間かがみの拳骨がこなたの脳天に直撃する。あー、自業自得だな。言わなくて良かった。

「っるさいわよ！後、かがみん言うな！」

ご機嫌斜めになった。ふむ、彼女の前では体重の話は禁句ものだな。・・・・・・・・・・・・・覚えておこう。

しかし、女子って如何でも良すぎるところで彼是言うと聞く。

まあ、デリケートだろうし、僕にはさっぱり解らないところがあってもおかしくはないだろう。

そして彼女らは騒いで駄弁る。

冗談、笑い、呆れ。

感情の詰まった会話が僕の目の前で広がっている。

会話の内容はなんなのか？僕には解る物ではないが、それでも楽しそうである事に変わりは無いだろう。

時に笑って、時に怒って、時に呆れて、時に恥ずかしがり、時に残念になる。

こんな体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・僕にはない。

去年もこの通りだったのだろう。彼女らの様子は・・・・

世の中には僕の知らないことが泉水のように今日も溢れ、消えて行っている。

僕の知らない物語がある。

「楽しそうな奴ら・・・・・」
無表情で僕は言った。

戯言で塗れた彼女たちの会話は、何処にでも居る一般的平常の女子高校生達だった。

一人一人が個性を持つ事で、それは膨らむ。

僕もまたそれだ。

４人の女子高校生の生活に――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――僕が加わっている。

弐話（後書き）

次回も更新未定です。すいません・・・

参話（前書き）

更新です。
結構時間が掛かりました。
※１０月２５日編集しました

参話

「んーやっと終わったー」

そんな声と共に放課後となった。

ゴールデンウィーク明けの中間テストが終了し、テストの3文字から解放された生徒たちは、羽を伸ばした鳥のように優雅に終わったと言う気分を味わっていた。

しかし、一方では「テストってなんだよ！問題を適当に並べた只の紙切れじゃねえか！森林伐採して作った繊細な紙をこんなもんのために風に無駄にしてんじゃねえよ！文部科学省の糞野郎！」と八つ当たりする生徒や「何処解んなかったー？」とか「俺もうぜんぜん駄目だったわー」と言い合う生徒もいる。

そんな五月蠅い生徒から開放を求めるべく、こなたたちと共にさっさと教室を後にする。

「嘉音君は如何だったー？」

昇降口でローファーに履き替えたこなたが僕に話しかける。いかにも得意げな顔で言って来た。

いるんだよなあ。普段は全然駄目なのに、珍しく良く出来ると積極的に聞いてくる奴・・・・・・・・

「まあ、何時もよりは多く書けたって感じしかねぇな」

僕は、大して変わりないと言うか、勉強会のお陰で少しは多く回答が出来たといえる。

「お前は？」
「私は一夜漬けのヤマが当たって、随分と良かったよー？」
「あっそ」

予想通りの返答で僕は呆れ顔で溜息をついた。
成績など僕にとってはどうでも良いのだ。一々高得点を取ったところで、この学園を卒業して、進学する先もない。
進路もない。進学する気さえないが・・・・・

かがみがやがて来て、僕らは5人で帰る。

僕は基本的に話題を出さない、無口なので殆どこなたたちが話題を出す。
それを僕に振る。

そういう、パターンが僕らの日常に成っている。

基本的に僕に話を振られることになろうと、清清しく淡々に答えるだけであまり話しに乗らず、つまらない会話になるだけで虚しかった。
よく会話の中に『嘉音君って冷たいねー』と入る。

まあ、そうだろうな・・・・・
自分じゃ、そう思ってないけど・・・・・

癖で素っ気無く呆気なく答えることが僕には多い。そのため『冷たい』と思われるのは当たり前だ。
まあ、僕の感覚感情が劣性しているからだろうが・・・・・・

感情が劣性している為、まともな反応も出来ないし、まとも感情表現も出来ない。

ここ記憶上で、僕が笑った覚えはない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

いや、それ以前に笑う機会ってあったか？

彼女たちに出会って笑った事はない。それは、全て呆れる話であり、笑い箇所が全く無かった為で、笑う機械もあっただろうが、それは僕が馬鹿にされたときであり、僕が笑う機会などもっぱらなかった。

寧ろ溜息を吐き、呆れたりする方が断然多かった。

勿論、過去で笑った事はない。

そもそも、友達がいなかったのに、笑う場所が何処にあると言うのだろうか？

自分で自分の考えを否定する僕。

「ねえねえ、みんなー、この後って用事ある？」

「私とつかさはないわ」

「みゆきさんは？」

「私は少し母に用事を頼まれていますので、すいません」

「嘉音君は？」

来た。

勿論僕に予定などないが、街に行けば厄介が来るので、好きではないが、しかし、友達の誘いを何度も断ると言うのは良くない。

とは、いうものの僕は

「めんどいからパス」

と言って断る。素っ気無く呆気なく事もなく断る。やはり冷たい僕。

「えーなんでー！どうせ暇なんでしょ？」

「僕は別に暇が嫌いなわけじゃないんだよ。誰にだってあるだろ？偶には一日中世間から離れて、暇で一日を潰すって事」

「でも、その暇を有効活用しなくちゃ！」

「じゃあ、僕は今から買出しに行こう。それから、参考書でも買いに行ってそれから、暇を潰すものでも探すか」

「ちょ！無理やり予定を入れないでよ。っていうか、そんなの帰りにすればいいじゃん！趣味もないくせに！ずぼらのくせに！成績も良くないくせに！無表情のクセに！」

ぎゃあぎゃあとこなたは言ってくる。耳が痛い。そして、凄い言われ様だ。

結局言い合いになるのだが、大抵がこなたが攻めて僕が逃げるように適当に言い訳するという感じの口論になっている。

彼女の攻めは結構根気を持たなければ一瞬で負けるものであり、それに対して僕はそれに凄く強い。

だが、口論して厄介から逃れるのも飽き飽きだ。これ以上口論したところで僕の根が折れるだけだ。

「わかったよ」

僕はしぶしぶ了解したのだった。

陵桜からバスで駅まで行って、東京方面まで一緒に行くと途中の駅で僕らとみゆきは別れた。

目的地は秋葉原。

趣味が濃い街で僕が嫌でも行きたくない場所だったが、仕方ないとしよう。
相変わらない量の人間が、街の中を蟻の行列のように蠢いていた。
これが全部オタクなんだよなぁ。別にいいけど。

まず最初に訪れたのが、専門店らしき店である『アニメイト』だった。前代未聞である。

「あーぜんぜん知らねえ店だなあ」
というよりも、全く来ないなこんな店(ところ)。言っても買うものさえないだろうし。

ズラリと並べられた本棚を見て僕は、「こんなに漫画をかいている人間がいるとは、流石だ」などとほざき、店内をぐるぐると見渡した。

漫画漫画漫画漫画漫画漫画漫画・・・・・・DVDDVDVDVDVDVDVDVDVDVDVDVD・・・・・・ラノベラノベラノベラノベラノベラノベラノベラノベ・・・

すごい数だな。

そして、全部興味ねー。

しかも・・・・・

「いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいらっっっ

戦闘効果音のような、声とＢＧＭが流れてくる。ますます訳分からん。

ここの店の店員はどうかしている。一度脳内外科にでも行ったほうがいい。

僕はそんな事を思うのだった。

ラノベコーナーへ行き、暇つぶしになりそうな本を探す。
興味がある無い、オタク物は別として、基本的に、長編で暇つぶしなりそうな物を探す。

ラノベは全くと言うほどではないが読んだことがないので、基本的に図書館から借りてきた、暇つぶしになりそうなものを主に読んでいる。
全部長編で分厚いものだが・・・・・

と言うよりも、暇つぶしの為に長編を選んでいるので、全部興味はなかったりする。

「さてと、面白いものは・・・・・」
それを掛け声にして、探し始める・・・・・

イラストが頭にきていると言うか・・・・・・・・・・・・・・・

本の数に頭が痛くなり、開放を求める為僕はその場を後にした。

空気が悪い。

この空気に慣れている人間は、相当特殊な体と内臓と脳みその持ち主に違いない。

こんなものに嵌っている作者もどうにかしている・・・・・・・・・・・・・何やってんだよ。受験生のクセに・・・・

「はぁ」

溜息が出た。何故だか知らないが溜息が出た。疲れているのかもしれない。

しかし、良くこんな濃いものに嵌る事ができるな・・・・・・・・・・

到底僕には理解は不能だろうが、何らかのきっかけがあったのかも知れないな。まあ、この人言うたちは精々僕の全く無縁で知らない場所で精一杯頑張ってほしいものだ。

日本の為にはならないと思うが・・・・・・・・・・・・・・・

「んー、でも此処には無かったんだよねー」
「は？」
如何いう意味だそれ？

「欲しい物が無かったんだー」
「じゃあ、何だ？それは・・・・・・・・・・・？」
こなたが両手に持っている、買い物袋に目をやる。ぎっしり漫画やら雑誌やら食玩が入っているのだろう。
こいつ絶対金銭感覚を狂ってるな。

僕の場合はお金を使う事が苦手なので、有ったとしてもここまで買わない。
そもそも買う気など真っ平、さっぱり、これっぽっち、まるっきり、これほども、無い。

「いやー、予想外の出費」
「・・・・・」

※お金は計画的に使いましょう。真面目な話。金銭感覚を失ったとしても、身近な事を考えましょう。

「「？」」

今一瞬ナレーションが流れたような気がする・・・・・・・・・・・・・・・まあいいか。

僕はこなたに振り向き

「で？無かったから他の場所に買いに行くと？」

と問う。

「勿論」

・・・・・・・・・退屈しないな。こいつは、暇つぶしに丁度いい奴なのかもしれない。
でも、面倒くさいのは変わりないが。

僕らは店の外に出てかがみ達が来るのを待つことにした。

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

会話が無い。

まあ、僕が相手では、話に成らないだろうし、僕が彼女の話に付いていけそうにも無いだろう。
でも、僕から会話を出しても、何かが変わるわけでもないだろう。

「なあ？」
「なに？」
「お前は、何でこんな事やっているんだ？」
「？どゆこと？」
「何でお前は、そんなもの集めてるっつうか、なんつうか、僕にもよく解らないんだけど、何でそんな事やってるのかって、気になってね」
「そりゃあ、楽しいからだよ。萌える美少女の二次元って楽しいじゃん？」
解らん。あと1日で終わるような、そんな楽しみ・・・・

「じゃあ、質問を変える。お前は何故そんなものを集め始めた切っ掛けはあるのか？」
「んー、家はお父さんの影響かな。昔っから私にそういう雑誌とか見せてね。それからだんだんとなってってさあ」
「父が切っ掛けね」
何やってんだよ父親。

子供に常総教育に教え方を間違ってんじゃねえか？

若しかしたら危ない父親なのかもしれない。

僕も親が居れば何かを始めていたかもしれない。そして、彼女達とも会わなかったのかもしれない。

「お前がそんなんじゃ、お母さんも大変だな・・・・」
家内にこんな娘と父親を持つ母親も大変だ。良く頑張っているのだろう。

「あー、ウチお母さん居ないから・・・」
「・・・・・・」

前言撤回。他界していた・・・・・・

――――――

母親が居ない生活も苦しいだろう。と僕は一つ同情する事にした。
でも、この娘であれば、家事も出来るだろうし、僕が気にする事でもないだろう。
家族の顔だけでも知っているだけでも、嬉しいと思ってほしいものだ。

そのときの僕の無表情はこなたから見れば冷酷な表情だっただろうか？

会話と回想が終了したところで、かがみ達が戻ってきた。
ラノベが有ったのか、かがみは買い物の袋を手に提げていた。

「お前も、こなたと一緒な物でも買ったのか？」
「いや、私は違うから・・・って言うか、こいつと一緒にしないでよ！」
怒った。僕に対して初めて怒った。

結構面白い。

「あっそ。まあ、将来が心配だ。今ならやり直せるぜ？」
「如何いう意味よ！それ！」
「そのまんまの意味だ」

そして新たに目的の物を求めに、さっきのところと何ら変わらないと思う『ゲーマーズ』にやってきた。
距離はそう離れてはいないのだが、人ごみを逆流する形で僕らはここにたどり着いた。

「なあ、かがみ」
「何？」
僕は、店の端で店に愚痴をつけるように発言する。
「此処って、さっきの場所と何か変わったところがあるか？おなじ専門店外だと思うのだけど・・・・・？」
「いや、私にも分からないわ。そういう話」
ふたつ在ってもしょうがねえだろうよ・・・・
こなた達は店に踏み込むが、僕は何かしらの違和感を持っていたため、店の前で待つ事にした。
どうしても、この手の店の空気に耐えられない。
あの独特の匂いがなんだか肺に来る。そして苦しくて見苦しくて気持ち悪かった。
でも、この街の空気に慣れ掛けている自分があった。凄く嫌だった。
さて、勿論の事なのだが、店の外にいるとなれば大いに暇なのだ。
携帯も弄る意味も無い。
僕は人ごみの寄らない道の端に移動し暇を潰すべく空を見上げる。
ここにある空気は何か、逃げていると言う感覚を持たせてくれる。
僕が思うに、『趣味に走る事で、自分の現実から逃れる』と言う考えになるのだが。
でも、それもいい現実逃避手段だった。

見上げた空には白い雲があり、太陽を隠すか隠さないかの境目に有った。

「空はこんなに広いのに、何で僕は記憶消失なんだろうなぁ」

・・・・・・・・。

というか、空と自分の記憶という、全く持って無関係すぎるものを比べても意味がない。只虚しいだけだった。

自分の小ささを改めて実感する瞬間だった。

「『瞬間』・・・か」

それは、一瞬的な物と同じで、気づけば終わっている・・・と言う意味。と僕は捕らえている。

僕の目の前を知らない人間が、過ぎていく時間も一瞬。車が僕の視界に入ってすぐ消えるのも一瞬。

瞬きするのも、時間と言う感覚を得るのも、一瞬で僕と言う存在が生きているのも、地球が産まれてからの年月からすれば、一瞬に過ぎないのかもしれない。

一秒寸刻みして動いているこの世界も、変化が生まれ、そして存在や考えが消えて逝っている。

そんな、一秒寸刻みの世界で、今も、考えている人、歩いている人、遊んでいる人、笑っている人、悲しんでいる人、暇を持て余している人、勉強している人、スポーツの練習をしている人、研究をしている人、会議をしている人、独り言をぼやいている人、悩みを抱え

ている人、命を落としている人、死んだ人、もしくは死にかけている人、殺された人、もしくは殺されかけている人が居る。

その中で僕は、暇を持て余し佇んで回想して考えて黄昏て居る人だ。

そして、こんな考えが終わりを告げるのも一瞬だった。

なぜなら――――――

というよりも、記憶力が弱い僕としては、見ず知らずの人間に馴れ馴れしく話しかけられるとなると非常に難儀なのだが・・・・・・・・・

でも、彼女たちは何かを僕に訊こうとしているのかも知れない。そうなると、とても楽なのだが・・・・・・・・

「もしかして・・・・神沢先輩ですか？」

前言撤回！知り合いでしたっ！

でも、本当にこんな人物と知り合いになる機会など早々ないぞ？

「えーと・・・・」

記憶検索をしながら思い出そうとするが思い出せない。記憶以前に会っていたとなれば、勿論どうにもならない。

「あなた誰ですか？」

とりあえず、こういって置くのが一番だろう。

「「え！？」」

二人して声を上げた。

そりゃあ、そうだろう。僕からすれば見ず知らずなのに、彼女からすれば親友関係にあったのかもしれない。

「あの、私ですよ？『八坂こう』です！そして、私の隣に居るのが『永森やまと』ですよ？」

「知らん」

ばっさり。

「というか、僕は君たちにあったことがあるか？」

「はい。あの、神沢先輩。私たちは中学の先輩後輩だったんですけど・・・本当に覚えていないんですか？」

「じゃあ、無理だわ」

中学ね。それは覚えていないな。だって記憶ないし。

「僕は、正直忘れたくて忘れているわけじゃないんだけどね。気が付いたときには家に居た」

全くおかしな話だ。自分でもそう思う。

『自分の意識が気が付いたときには、家の中心で、胡坐を掻いて、座っていた』と言う馬鹿げた話。

それより前に、意識が戻った感覚も、記憶もなかったのだ。

全くおかしすぎる話だ。

まるで、新しく生を受けた『生き物』のような感覚だった。

僕が中学に居たとなれば、その中学時のときに、『何かがあった』ーーーーーーーーと言うことなのだろう。

まあ、別に知りたくもないが・・・

思い出しても仕方ない記憶を、僕はあえて訊かない。
訊いて、気づいて、解って、知って、思い出して、何かが変わるわけでもない。

「でも、仕方ないですよね。『例の事件』以来、先輩の姿を見かけている人が先輩を知っている人で一人も居ないんですから。何があったかなんて、分かる筈もありませんから」

『例の事件』。

それは、僕の身に遭った事なのだろう。

どんな類であれ、いかなる内容だろうと、僕の感情には興味の欠片も、好奇心も、一切なかった。

普通であれば、勿論追求するだろう。

でも、僕にとってその話は只の文章だ。としか思わなかった。

「まあ、深くは訊かないよ。興味もないし、無駄足を踏んだり、傷ついたり、一々喋ったり、一々頭ぐるぐる回転させて動かしたり、そんな興味もない無駄な時間を使って暇つぶしよりつまらない事に面倒な事はしたくないからね」

鬱陶しい――――――――――――――――――――――――――――と僕は言う。

二人の顔がまた変わる。希望を砕かれたような顔。それを見る僕の無表情の顔も本当に冷酷だろう。

「　　」
やまとが何かを呟いた。
でも、僕の鼓膜にはその言葉を聞く前に、車の走行音で掻き消された。
何を愚痴ったのか、僕は知らなければ訊く気もなかった。
「で？お前らに訊くんだが・・・・こんな結滞な街で何やってんだ？」
あ。と二人が声を漏らす。
何かを忘れていた模様。
それと同時に一気に人ごみの中を八坂こうは、駆け抜け行った。
「？」
「たしか、こうは、今日何かがあるって言って来たのよ。私にもよく解らないんだけど、同人目当てでしょうね」
「同人？まあ、よく分かんないけど、頑張れ」
「分かっているわ」
そう言ってこうの後を追うべく、やまとは去っていった。
後姿が見えなくなるのは、一瞬で、視線の先には人ごみの集団だけだった。
鬱陶しく感じながら、視線を空に向ける。

「八坂こうに永森やまと・・・・・か。僕にも、ああ言う人間繋がりが在ったんだな」

彼女『永森やまと』は、昔の僕と、今の僕と比べて、あきらかに態度を変えている。

もう少し、親近感のあるものだっただろう。

あれは、好きで変えているわけではないだろう。

昔の僕に接していた態度は、友情的でとても親しげで楽しいものだったのだろう。若しかしたら、僕と彼女は何か特殊な関係でもあったのかもしれない。

昔の僕を知っているとなれば、親しげに僕を呼んでいたのかもしれないし、そうとなれば、今の静かな感じの雰囲気をするはずがないのだ。

最も友情が深くて、特別な繋がりを持っていたのかもしれない。

でも、それが如何いう感情であるか、曖昧にも想像出来なかった。

僕が昔、どんな風な人間だったのかは、知らない。

でも、今の僕と比べれば、かなりの大差があるだろう。

いったい如何いう風な奴だったのだろうか？

やまとが態度を変えていた――――――――――――――――――――――――それは、恐らく昔の僕の性格が彼女をそうさせたに違いない。

昔の僕が彼女の態度を変えさせる、たやすい人間だったという程度の話でもある。

どんな人間でも、和解しあう事で、変われるものだ。

彼女もその部類であるはずだ。

いつか僕の彼女と同じ類に入る事になるだろう。今のところ僕にはその予定もないし、僕自身に変化はなかった。

でも、変化はあった。

僕の日常は変わった。

彼女たちとの出会いで、変化した。

何気ない変わりない何処にでもある只の出会いによって、静かで平凡で何もなかった僕の日常は、掻き混ぜられ騒がしくて五月蠅くて鬱陶しくて呆れて退屈しない日常に変わったのだ。

騒がしいのは苦手だ。やかましいのは鬱陶しい。五月蠅いのは嫌いだ。

でも、それに慣れたと言うことは、僕も変わったと言うことだろう。

それは、嬉しい事でもあったのかもしれない。

何時かこんな事をしていて僕自身が変化を遂げるのだろうか？それはやはり運命とか人生の歩み方で決まると言うことだろう。

生憎僕はそんなものに振り回される気はないが・・・

「おまたせー」

店から出てきたのか、僕に話しかけるこなた。
その手には、さっきより倍増した結構大きい袋を持っていた。
どんだけ買ってんだよ。

「終わったか？」
荷物に僕は目もくれず、3人がその倍に居る事を確認する。
「まあ、大体ここにはあったから、結構買えたねー」
「まあどうでもいいけど・・・」

沢山買えたとか沢山買えなかったとか、そんなのはどうでもいい。
本人が満足しているのなら僕が気にする事でもない。
やがて来たかがみたちと合流して、『ゲマズ』を後にする。
これでやっと帰れると嘆息を吐くが・・・
「さあ、今後はゲーセンにいこー！」
新たに予定が出た。
『ゲーセン』ーーー

ゲームセンター』。

暇人が好んでくる暇人の為の暇人の店である。

いや、別に暇人だけが来るわけでもなく、人が目的の物が有って来る所でもある。

目的の物と言うものの、ＵＦＯキャッチャーで取れる人形程度だが・・・・・・

ンで、到着。

五月蠅い効果音とＢＧＭが耳に大きく響く。僕ってこんなに聴力が良かったっけ？

「やはり、暇人の来る場所だな・・・・」

現在僕は荷物を手に持っている。

それは、こなたから持たされたものだった。

自分から持つなどと言うお節介な性格を僕は持っていないものであり、全くこなたの苦労気味と『重たい』と言う言葉を徹底的に完膚なきまでに『完璧に無視』していた。

そのため、後々からこなたに重々嫌々にいろいろといわれ現在僕は持っているわけである。

重くはないのだが、歩きにくく邪魔だった。

こなたたちは僕を放って置いて、さっさとゲーセンの中に消えてい

った。

「荷物くらい自分で持てよ・・・・」

溜息を吐きながら、僕も店の中を進行する。

ＵＦＯキャッチャーやら、レースゲームやら、格ゲー台が、並んでいる。

僕は全部興味ないが、人が面白そうにやっているのを見れば、楽しそうには見えた。

そう思ったとき

その瞬間ーーー

――――――

いったい今のはなんだ？あんなもの、感じた事がない。

地獄に引き摺り込ませられる様な、恐怖と、死を目前にした恐怖のような感覚。

『殺気』『死線』『恐怖』『困惑』『混乱』『憎悪』『怨恨』『闇』。

そんな良くないものが一気に背中に当てられたような視線。

こんなのは初めてだ。

血の気が引く。

恐怖を感じたのか、汗を掻いていた。

今まで、こんな経験はない。始めてあんなものを感じた。

自分は臆病なのかもしれない。

一歩踏み出して、考え込むが・・・

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！また負けたーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！」

叫び声が耳に大きく響き、考え事が消し飛んだ。

「？」

わけが解らず、とりあえず方向に向かってみる。

「・・・・・」

格ゲーをしているのは、『八坂こう』で、頭を抱え髪をぐしゃぐしゃと掻いていた。対戦相手は、『こなた』だった。

『また負けた』と言うあたり、何戦かしているのだろう。

八坂の後ろには、やまとが居る。退屈半分の顔をしている。

ためしに僕は傍観してみる事にした。

「もう一回！」

積み上げられた１００円の小銭を入れて、レバーとボタンを操る。

八坂の顔がゲームスタート直後に一転してヤル気満々の形相に変化し、レバーとボタンを激しく押して動かす。

あんな物で、あそこまで精一杯一生懸命真剣にやろうとする気持ちが解らん。

何かを賭けている訳でもないだろう。

そんでもって、２分後。

「負けたあああああああああああああああああああ！！！！」

八坂こうの全敗。残念でした。

どうやら、こなたの方が一枚上手の様で、八坂が負けるのも仕方がないと思い、傍観も飽きた頃だったので、その場を後にした。

ＵＦＯキャッチャーにて・・・

「あれが中々獲れないのよ」

プラスチックの透明なケースの向こうにある人形に指を刺した。
蛙？の人形だが、見事宇宙人に見える人形で、少し斜めった状態だった。

「（人によって欲しがる物は色々だな・・・・・・ほんと）」

今もかがみはチャレンジ中・・・・

だが僕がみている限り現在１０回目になる。

一回１００円。１０回千円。

これでは何時の間にか金が消滅しかねない。

そこらで僕は忠告のように独り言のように言った。

「偉い人は言いました。ゲーセンの機械たちは貯金箱であると」

「・・・・上手いわねそいつ」

気づいたら2千円も使ってたわ・・・とかがみが自分の財布の中身を見ていった。

「あんたやってみる？」

そういいながら残り1枚の百円を、僕に渡してきた。

「はあ？」
思わずそんな声が漏れる。
「だから、やってみるっていってのよ？」
「いや、やったことのない人間に対して、無駄に百円を使っていいのか？」
僕はこの手の機器に手を出した事はない。勿論経験もないわけで、操作がわかったところ、どうにもならないのだ。
「いいから、やってみなさい」
無理やり渡された。
しぶしぶ僕は荷物を手首に掛け、百円を入れると、かがみが欲しそうな奴のところまでキャッチャーを持ってゆき、ボタンを押した。
アームが人形を掴み、見事の事獲れた。
「・・・・・」
人形を手に取って見る。
うわ、何だ？この蛙？軍曹っぽい。
僕はこんなものを家に置いていても何れ埃を被るだろうことを考え、かがみに差し出した。
「やる」

「え？いいの？」
「当たり前だ。と言うか僕がこんなものを欲しがると思うか？」
僕はこういうのは嫌いだ。と付け足す。

「あ、ありがとう」
かがみは顔を赤らめながら、人形を受け取りそう言った。
かがみがなぜ顔を赤らめているのか、さっぱり僕には解らない。
けれどそれは、僕の知らない感情の一つなのだろう。

「いいよ」
かがみのお礼に僕は素っ気無く言葉を返すだけだった。

その後、満足したらしくこなたが戻ってきたため、今日は帰ることにした。
ゲーセンを出て、秋葉原の街道へ出る。人ごみを抜けながら、駅までたどり着き切符を買って電車に乗る。
僕の方面と彼女たちの方面は、途中まで一緒だが、僕だけ違う地区なので、幾つか前の駅で降りる。

「バイバーイ」
「じゃあ、また明日」
「また明日。学校でね～」
サヨナラの声が聞こえる。

僕は振り向かないまま片手を上げて、「じゃ」と言って、3人の友達に見送られながら僕は、駅のホームに足を踏み入れる。

電車が去る音を聞きながら、階段を上がって改札口まで来て、そこを通り、駅を出る。

見慣れた風景が、僕の視界に入ってくる。

何時もどおりの帰路につく、道は狭いが、後ろに太陽があるので、眩しい道のりではなかった。

「・・・・・・・・・」

さっきから――――――――――誰かに着かれている。

不審者か？それとも、『あのときの人間』か？

ともかく、狭い路地に向かう。僕が追い詰められるだろうが、それは仕方ない事だった。

建設されたての人影が全くない、工場前にやってきた。鉄骨がそこらじゅうに転がっている。

「！」

目の前に招待がそれは現れた。

二人。いや7人か。
後ろを振り向くと１０人はいた。

何かをした覚えはないが、あのときの奴らなのかもしれない。

「よう！小僧」

一人が僕に話しかける。

頭に包帯で怪我をしたチャラい人間。若しかしたら頭がイカれてたから手術した後なのかもしれない。

「よくも、この前は腕折ってくれたなぁ！？」

腕を折った？

はて？ここのところ環境に変化があったから覚えては居ないな。

あ、思い出した。

肩ぶつかってぶっ倒した奴だったな。確か3人程度いたんだけど・・・・・・・・・・・いたいた。

「お陰で、こっちは他のグループに舐められちまったんだよ！如何落とし前をつけてくれんだぁ？」

そんな気はさらさらねえよ。

一々突っ掛かってくるから鬱陶しいんだよなあ、こういう輩。

プライドが壊されると、八つ当たりしてくる奴。

毎回毎回相手するのは面倒だからここで全部潰しておくのも悪くないだろう。

絶対喧嘩を二度と売れない様に叩き潰す。完膚なきまでに壊す。

「落とし前？そんな物、喧嘩に勝てばいいだけの話だろ？お前らの話なんて僕にとって馬鹿話なんだよ。いい加減失せろ。目障りだ馬鹿！」

ぷつん。

何かが切れた音がした。

次の瞬間僕の目の前にいた人間がナイフを翳す。

太陽の光を受け、煌き振り下ろしてくる。僕は横に身を動かし避ける。

これ異常は後ろに下がれない。狭い路地なので少し横に動けば壁にぶつかる。

こんなところで、腕を振り回したら壊れてしまう。さっさと広い場所に出よう。

幸いこの先に広い工事現場があって、人が来る事がない。

「死ね！」

ナイフが横に振られる。今度は避けられない。

だから跳躍する。自慢ではない脚力で体が宙に浮き軽く奴の２ｍ上空まで上がった。

その下をナイフが駆け抜け、壁に引っかかる。

敵は一人ではない、１７対僕だ。

着地する場所を誤れば、下手に攻撃を食らう事になる。

コンクリートの壁に手を突っ込み、穴を開けてそこに手をかけた。これで落ちる事はないが、投擲物が来るだろうことを考えて、壁を蹴る。

壊す気はなかったのだが、それでも容易く壊れたコンクリートの壁を蹴ったことで、滞空する。

距離は小さいが、真下を見ると前には誰もいない空白の場所があった。

そこに着地する。後ろから戦声が聞こえるが、構わず前に走る。ここを抜ければ広い場所に出れる。

路地を抜けると広い空間があった。
ところどころに邪魔な器物や鉄骨や鉄パイプなどが固まっておいてある。

路地から、あふれ出すように、さっきの奴らが現れる。

あれ？人数が増えてないか？さっき数えたのは１７人だったが、２０人に増えている。

厄介だなあ。と思いつつ佇む。

「追い詰められたなぁ？」
「追い詰められる為にここに来るか？普通？」

他愛のない話を終えて戦闘が始まる。

殺す気だ。僕を・・・・

金属バッドに、鉄パイプ、ナイフに、釘バッド、鉈に、鎌。

まあ、普通の凶器といえば凶器だな・・・

怒涛と共に、目の前にいる全員が散らばった。

錯乱攻撃？という戦術かどうか知らないが、まあそんな戦術を持っているとは思えない。

右後ろに気配。ぶっとい棍棒の様な鉄パイプが、振られる。
少し上に跳躍すれば避けれる攻撃だったので、跳躍する。
下を奴ががすり抜けてゆく。
着地して、拳を作り奴をぶん殴る。
顔面を殴った為、顔の鼻の骨が砕けるような感触が響いた。
そのまま、ぶっ飛び何度か跳ねて瓦礫に埋まった。
それにも目もくれない。奴らは、思い思いの武器を持ち、振り回す。
最初は目の前に来た奴の横腹を蹴り当てる。肋骨が砕けると同時に横に打っ飛びそのまま何人か巻き込んで、倒れた。
振り下ろされた、金属バッドを右腕で受け止める。感触が響く。衝撃も痛みもない。
神経が何も感じていないのか、骨が折れる気配もない。
寧ろ折れたのは金属バッドの方で、その刀身の部分が宙を舞っていた。
左腕は、ナイフの刃を受け止める。だがこちらは皮膚が裂け血が流れた。だけど離さず、痛みを感じながら圧し折った。
右膝を上げて折れたバッドを持った奴のアバラに打ち込む。

ベキベキと音が鳴って、骨が折れた。否、砕いた。

体は軽く浮きそのまま跳ぶ。

ナイフの刀身を捨てながら、右拳を握り横頭(よここうべ)を殴る。

頭蓋骨が割れる感触と、皮膚の歪みによって頭皮が裂け、血が出るのを感じながら、ぶっ飛ばす。

全部ぶっ飛ばしてばっかりだな・・・・構わないか。

攻撃を避けるため、後ろに跳躍して後退する。

それを追って奴等も来る。

跳躍。消して長くはない足を伸ばしながら、奴らの上空へ滞空する。

体を翻し体を逆さにして、掌を広げて腕を伸ばす。

けして僕の腕や足は長くないが、強靭な肉体と力量筋力脚力握力を持ち合わせているとなれば、それは立派な脅威者である。

僕が目掛けるのは一人に奴で、鉈を持った奴だった。

そいつは鉈の平で守るように翳す。そこに僕の掌が衝突する事になる。

結果は簡単。鉈が砕けて平手打ちが奴の顔面に打ち込まれた。

掌が顔面の鼻の骨を潰し、それから手の当たっている部分が異響な音を立てる。

そのまま奴の体は地面に打ち落とされる。

そして絶叫を上げながら転がりまわり、顔から出る血を撒き散らす。

けして僕は表情を変えないまま、奴らに近づく。一歩で十分だった。

腕を螺旋(ねじ)りながら腹を目掛けて、掌底を繰り出す。

技名はない。

強靭の筋力が収束した掌底が、皮膚に衝撃を与え、内臓に損傷を与える。

掌底を受けた奴は吐血し、血を吹き散らす。

少し体を後ろにそらして軽く跳躍すると右足を振り上げて体を回転させ、横頭(よここうべ)に蹴りを加える。

脛がぶつかる部分となり、横に奴を吹っ飛ばした。

ぼたんぼたんと跳ねて、そいつは置いてあった鉄骨に頭を打ち付け、血が流れる。

「ひぃぃぃ〜」

自信がなくなったのか、自ら逃げ出す奴らに僕は容赦をする気もなかった。

僕は、近くにあった鉄骨を持ち上げて投擲する。

宙で、鉄骨は何回か回転して奴らの逃げ道を阻み塞いだ。

「残念でした。ここでお前らは死ね！」

そして僕は本気で喧嘩をする。

・・・

が、現在は救急車に運ばれている。
勿論僕が犯人だが、正当防衛といったが、過剰防衛と言い返されたが、僕の体質に付いて話したら、何か知らんが許してくれた。
何かに脅えているようで、僕にはよく解らなかった。
アパートに辿り着くと、同じアパート住民に会った。
「お、今帰ったか。嘉音」
「どうも、みえかさん」
隣の住民の、『麻原　みえか』さんである。
現在２３歳のフリーターで、趣味として体術をやっているため、たまに一緒に練習している。
腕はみえかさんの方が上だが、力量というあたり僕が上である。
「こんな時間に帰ってくるとは・・・・・・・・・・・・・・新しいバイトでも見つけたのか？」
「いや、少し野暮用で、遭った事がありましてね。今までそれをやってました」
「そうか」
そういいながら、手に提げていた袋を僕に差し出す。
「なんですかこれ？」
「この前京都に行ってきたお土産だ。『八つ橋』という食べ物だ。美味しいぞ。あげる」
「はあ、じゃあいただきます」

そう言って僕は受け取った。

「じゃあ、私はこれから梨川と用があるから」

そう言って僕に踵を向けて去った。

部屋までの階段を上り、自分の部屋の鍵をバッグから取り出し、あける。

狭い玄関が広がりそれに続いて部屋ごとに分けられた廊下があり、一番奥がリビングになっている。

リビングに行き、鞄と八つ橋をキッチンの机に置くと学生服を脱ぐと、風呂場へ向かった。

そしてシャワーだけを浴び、顔についた鮮血を濡らして落とす。

それだけを終わると、風呂から出て、髪を乾かし、軽く着替え、布団を敷いて、電気を消すと布団に潜った。

現在時刻8時3分。

意識が消える。

参話（後書き）

何気なくやまとを陵桜の学生にしてみました。

そして次の更新も未定です。毎回毎回すいません

※誤字があったので、いくつか編集も行ないました

肆話～いつもの日常一～（前書き）

やっとの事で更新です。最近はテストがありましたので、なかなか更新できませんでした。
相変わらずの駄文ですが、待ってた人待ってなかった人も読んでいってください。

肆話～いつもの日常一～

「ほんじゃ、この前のテスト。返すでー」

黒井先生のその言葉と共に中間テストの用紙が返却される。

それを聞いた生徒はブーイングを上げ、個人個人が物々と愚痴る奴も居れば、かったるそうな表情をして声を上げる奴が出てくる。

僕といえば、そんな事などすっかり忘れていた為、自分がどの位の点数を獲れたか等と考えたところで、意味はない。

精々何時もどおりの点を取れればそれで良いと思い、裏返された用紙をひっくり返す。

「・・・・・」

【78点】

そう点数が書かれていた。

まあ、何時もどおりであり、特に何かに影響するほどの点数ではない。

しかし、これはただの『数学（すうじのもんだいたち）』であり、総合点数が何点かは・・・数えないが、学年順位を見たところで大体分かるだろう。

教室は既に生徒の頻繁で批判な声で、騒がしくなっていた。

点数が悪かったといって物凄い形相を作っている生徒（何か、何かやらかしそうで怖い奴）や、点数が普通だったり良かったりした奴

が、声を掛け合っている。

さぞかし喜ばしいだろう。

僕にはそんな感情はないが・・・。

と、僕は思うものの、喜ばしくない奴の感情程度なら解ってやれたりする。

まあ、解ってやれるだけで、同情はしないのだけれど・・・

さて、僕の目の前の席に、『白石(しらいし)みのる』という、短髪で『白石みのる《セバスチャン》』と呼ばれている人間が存在する。

彼は一応人気者なのかはさっぱり解らないが、自分のテストの結果でがっくりする人間だという事はわかった。

「チクショウ・・・」

そう声が前から聞こえる。

よほど点数が悪かったのだろう。僕から見れば彼はそれ程頭は悪くはないと見えるのだが・・・・・・・

「二十八点かよ・・・・」

・・・・・。

前言撤回。

物凄く悪かった。やはり現実は厳しいな。

世の中人は見かけによらないな。まさに、僕の考えがそれを示していてくれる・・・

人は見かけによらない。という点で僕は人から見れば『ずぼら』に見えるらしい・・・・。

だが、それは偏見で僕は、すぼらではない。

一人暮らしに加え、特に不便もした事はない。

料理も出来れば、家事だって出来る。

それにしても・・・・

貳拾捌点（にじゅうはちてん）ーーーーーーーーーーーーかぁ・・・・

見かけない数字だな。特にテストの跡は尚更に僕の領域では見かけないな。

僕にそんな点数を取った事は一度もないが、若しかしたら小学校のあたりに取っていたのかも知れない。

ともあれ、僕には専ら真っ平全くもってこれっぽっち程も『無関係』だ。

また今度のテストで専ら頑張れーーーーーーと僕は内心で白石に言って置いた。

さて、僕は自分の『七十八点解答用紙（かみきれ）』を見つめながら、何処が間違っているかと見る。

「（ああ、時間無くって、書けなかった部分が殆ど間違っているな・・・まあ、修正とかする気はないけど）」

などと考えながら、僕は『数学の解答用紙（すうじのもんだかかみきれ）』を、ひらひらとして、机に放る。

ぼきぼきぼきぼき。と首を捻って骨を鳴らす。

べきべきべきべき。と背骨を鳴らす。

ぽきぽきぽきぽきぽきぽきぽき。と指の関節を鳴らす。

めきゃめきゃ。と腕の肘の骨を鳴らす。

・・・・・・。

うーん・・・僕の骨ってよく鳴るなあ・・・

どうでもいいか。骨が鳴るなど知ったことではない。

ーーーーーーと、僕はとっても諦めが良くて物凄く諦めが早い奴だった。

ーーーーーー

かれることになった。

「あー、何時もどおり。『七十八点』だったよ」
そういいながら『解答用紙(かみきれ)』を見せ付けた。

かがみは、「けっこう凄いわね」といった。感慨は無い。

「お前は？」
もちろん訊かれた僕は訊き返す。

「私はまあまあだったわ」
かがみのその言葉を聞いて僕は、ふうんと呟く。

ちなみに点数は『８９点』だった。

流石は優等生。他の教科も点数は高いだろう。

八十九点・・・か。
ふうむ、そこまで取った事は無いな。

でも、僕はそこまで点数を取ろうと思った事は無いし、そこまで点数を取るほど勉強を熱心にした事は、無い。

というか、そこまで高い点数を取ってもしょうがないので勉強を熱心にする事は無いな。

「お姉ちゃん、如何だったー？」
つかさが僕の机の横まで来て、かがみに問いかけた。

「まあまあね。つかさは？」
「訊かないでって感じなんだけどね・・・・頑張ったんだけど・・・・」
あははと。つかさは苦笑いする。
さては、良くなかったな。と内心で予想し、考えをそれだけで終わらせ、こなたが僕の机の前までやってきた。
「どうだったー？」
僕の机の前まで来た途端その話が振られる。
「何時もどおり」
僕は机に自分の『解答用紙（かみきれ）』を出してみせる。
「へえー、意外に取れてるー」
「・・・・・・」
・・・・・・

「で、一夜漬けのお前は如何だったんだ？」
特に怒る気もなく、僕はこなたに訊き返す。
「え？私？ふっふっふ」
急に笑い出した。
それを聞いた僕は、かなり不気味で気味が悪くて気持ち悪い。人間の裏の心情が怖くなってきた。
「お陰さまでばっちり」
ピースしながら彼女は何処から取り出したのか、僕にそれを見せた。
数学の解答用紙に書かれた点数は『８６点』。
誰もが納得のいかない点数であった。
それは勿論、一夜漬け程度でこんなに高得点を取ると成れば、納得はいかない。
だが、僕は納得する。
「ふうん。よかったじゃん。それは稀有だね」
違う意味で・・・・・・・・・・・・・

僕は、大いに納得した。

だって、それは稀希（まれまれ）の偶々で偶然すぎる一夜漬けで、いいヤマが当たった程度の話なのかも知れないからだ。

「むー、馬鹿にしてるね」

「そりゃあ、勿論」

笑わず呆れ顔にもならず何も篭らない無表情で僕は言った。

更に付け加えるように、僕は口走る。

「点数とって誇らしげにしている奴が、大いに馬鹿なんだよ。こんな紙切れに、赤いインクで二桁の数字を書かれた程度の物を渡されても僕は嬉しくない」

「うわ！酷っ！」

瞬間的に批判された。

「性分でね」

批判されようが僕の知ったことではない。

勝手に批判して愚痴言ってればいい。

愚物共の話など一言言えばいい。

それで終われば結果オーライだ。

「僕はエグいんだよ」
「やっぱり？」
人を傷つけるのも簡単。人を貶めるのも簡単。人を騙すのも簡単。
人を自殺に追いやるのは簡単だ。
でも、自分を傷つけるのは、自分を貶めるのは、自分を騙すのは、
自分を自殺に追いやるのは、難しい。
僕は酷い考えしか出来ない。というよりも、ただ考えが碌な考えが
思いつかないだけなのだろう。
「でも、良くそんな考えが出来るねー。ある意味才能だよ」
「才能？阿呆。巫山戯（ふざけ）るな」
いらねえぞ。そんな才能。
まるで僕が変人才能馬鹿みたいだ。
さておき、かがみのところへ行ったこなたは、早速かがみに突っ込
まれた。
「納得いかねえっ！」ってな感じで。突っ込んだところを見た。
言っとくが僕はあの突っ込みが大嫌いだ。
耳によく響いて五月蠅い。
「お前も、中々人気だな」
急に肩に手が置かれた。

多分聞いたことの無い声なので、僕は振り向く必要がないので、そのまま

「別に人気者なんかじゃないよ。彼女たちが単に僕の傍にいるだけだし・・・」

「ああ、お前ってそういう風な考え方してんのか」

「いや、ネガティブなだけ・・・・碌な事を『考え』たことはない」

「で？何でお前はあんな奴らの輪に入ってんだ？」

「僕はあの中に入りたくて入った訳じゃないんだよ。勝手に入れられた。何か拾ってきた玩具みたいに・・・勝手に玩具箱に入れられた気分だ」

「はあん」

「交代してくれないか？」

「それは、無理だろうな。俺にはそんな役は務まらない」

あっそ。

僕はそう呟いて、口走った。語った。

「別に、彼女たちの輪が嫌いなわけでもないんだけれど、なんていうのかな、ああいう馴れ合いが僕は慣れてないし、優しくしてもらうのも慣れていなくて、滅茶苦茶違和感があるんだ。あの雰囲気が・・・・・・・僕には、似合わない」

稀有な違和感。前代未聞の雰囲気。

なんだか彼女たちの雰囲気に僕は違和感がありすぎる。

経験の差というか・・・・生きていた長さと言うのが、僕と彼女たちの差だった。

普通に会話する事も、普通に言葉を投げかうのにも、僕は慣れていない。

今迄(いままで)、孤独で独りぼっちだったからなのかも知れない。

今の僕の生活は変わってしまっている。

彼女たちという亀裂によって・・・

いや、亀裂じゃなくて、光なのかもしれない。

埋もれていた僕に、闇にいた僕に、彼女たちは僅かな光を差し込んだのかもしれない。

まあ、そんな気配は――――――――――全くないけれど・・・

「あいつ達の輪に居て、神沢。お前は楽しそうに見えないのは何故だ？」

「僕は一度もあいつらと居て、楽しくないと思ったことはない。僕がただの・・・・あー、どうでもいい。忘れてくれていいよ」

――――――――――――――僕が、ただの無能で欠陥物だから。

そう言いたかったが、人に言う事でもないし、ましてや赤の他人で名も知らぬ人に、自分のことを分かってもらえる訳でもない。

人に自分の苦しさ、悲しさを伝える事で、人に分かってもらえると思っているのであれば、まあ、間違いではなのだが、僕のような人間に対して、そのような言葉を並べられても、鬱陶しいだけで、同情してあげるつもりはこれっぽっちもない。

「変わった奴だな」
「まあね。そのほうが気楽でいいからね」
こうして、僕と名の知らぬクラスメイトの会話を終えて、チャイムが鳴り、僕は颯爽と席に着いた。
・・・・・・・・・
キーンコーンカーンコーン
などという極当たり前のチャイムが鳴ると、授業を終えたという感覚に包まれる。
その瞬間、教室の中が一瞬にして脱力の声とともに騒がしく変化する。
「だるい」
授業を終えての最初の一言がそれだった。
いや、特に体の調子が悪いとか、体調が不調しているとかではなく、とっさに『だるい』という言葉が出たのだ。

意味はない。

独り言である。

さておき、机の上にある紙切れに僕は目をやる。

３時限目に世界史のテストを返却され、４時限目に英語のテストが返された。

世界史：７０点
英語：８７点

やはり、英語を少し頑張ったのが良かったのかもしれない。
世界史は特に期待もしていなかったので、適当半分のように書いたつもりだったので、こちらは何時もどおり。

真面目にテストをやったのは攻め手の英語だけだった。

あとは、放棄だった。やる気は勿論ない。

さて、昼飯である。
この時間になれば、朝食べてきた朝食もすでに、胃液で消化され、腹を巡っている頃である。
尚且つ、僕が教室という五月蠅い空間を抜け出す、時間であったりする。

こなたたちとは最近昼食は何時も別になっていた。

そして、しつこいこなたも、何かと諦めていてくれるようで、五月蠅い言葉を投げかけられなくてすんでいた。

幾つか前に『コンビに行って買ってこればいいじゃん』とか言われたときがあったが・・・・

そもそも僕は、食堂に行って買う派なので、コンビニなどというものは、精々缶コーヒーや稀に軽食を買うために使うので、昼飯などには買ってこない。

この学園内にもパンなどの軽食系の購買があるが、生憎僕はよっぽど腹の減ったときに、授業サボって買いに行く以外ない。

なので、学園一人気で、メニューが多く、どれも美味しいとされる食堂である『東食堂(あずま)』に、僕は赴いた。

以前に、ここの食堂にてキムチ丼一杯という、何が遭ったのか見当のつかない馬鹿げた人間のやることを、やらかした事がある。

そのため、3週間程度舌が碌に味覚を感じなくなっていた。

舌の感覚麻痺によって、物を食べても美味しくないという酷い地獄の毎日を味わったものだった。

そして僕は、誓った。二度とあのような悲劇を繰り返さない為に、キムチは二度と食べないと誓った。

・・・・・・そう街灯に誓った。

こう――――――――――――胸に手を当てないで佇んで、内心で

「誓うー」といって誓った。

・・・・・・・。

雑だな。神様が目の前に居たらきっと怒っているはずだ。

ま、嘘だけどね。

さて、キムチという生々しい辛さをもつ野菜集団と、馬鹿な誓いで怒った神様のことはどうでも良いとして、今日は何を食べようかとメニューを見る。

殆ど、食べたものばかりだが、麺類には手を出していなかったので、今日は狐饂飩(きつねうどん)でも、食べるとしよう。

麺類は嫌いだけど。

でも、他に食べるものもないので、これにするしかない訳ではないのだが、まあ気分だった。

気分＝狐饂飩。

・・・・並ぼう・・・・

そう思いながら列の方へ向いた。

しかし・・・・・・

「列が長いな・・・・」

芋虫の軍団という例えは、似合わないので、ここは普通の行列としておこう。

まあ、兎に角並んでおり、最後尾が何処にあるのかサッパリである。

並んでいたら昼放課が終わってしまうのかもしれない。

それ程長かった。

流石は、麺類人気の食堂だった。

ここで麺類を食うのであれば、早めに来なければならないようだった。

こうなってしまえば、麺類を諦めようと思い、仕方なく丼コーナーで牛丼を購入した。

迷っていたせいか・・・・食堂に空きはなかった。

さて、如何しようかと考えながら、僕は見渡す。

いまだに、騒ぎが響き、食べ終わった人たちはその場で駄弁っている。

そんな最中。

目の前の席が空いた。

僕はどうやら、厄介運と、良い運は、中々善いらしい。

早速座り、端を手に取ると、「いただきます」の一言を言ってから、牛肉を口に放る。

「・・・・・・・」

もぐもぐもぐ・・・・・・ごくん

「・・・・・結構美味いな」

紅生姜と一緒に牛肉を口に放って、食べ続ける。

うーん。やっぱり、紅生姜って美味しくない。唐っぽいと言うかしょっぱい。

それからは、何時もどおり黙々と箸を進めた。

やっぱり牛丼って美味しいな。

僕が黙々と食べていても、僕の周りの机には、誰も座らない。

殆どが僕に対して雰囲気的に本能で『気まずい』からであり、そもそも僕と友達になろうとする奴は居ない。

大抵、僕が何かするかが始まりだった。

まあ、こんな成りだし・・・・・・

だが、しかし・・・・・・

「あー、すまねえんだけどよ・・・・・」

何か、ガラガラしたようなそんな声が僕の耳に響いた。

「ん？」

その声の主は、黒髪にショートボブ？で、八重歯が口から少し見えている、少女だった。

「座ってもいいか？」

ごくん

僕は、食い物を飲み込んでから

「いいよ。勝手にすればいい」

それだけ言って、僕は箸を進めた。

名の知らぬ一人・・・・いや二人の少女は僕の目の前の席に座った。

気づかなかった。

と二人めが居たのだった。

もう一人は、腰よりもう少し下あたりまでの、狐の毛皮の色？（ま

あ、オレンジが少し薄い感じの色）の髪色に、カチューシャをしている、雰囲気的には聖人君子？っぽい・・・・

「（ま、僕には関係ないか・・・・）」

目線を丼に向けた。

もう、殆どなくなっている。後一口で終了だった。

「なあ、お前なんて名前なんだ？」

最後の一口で牛丼を食い終わり、水を飲み干すと、早速なのか彼女らは僕に話しかけてきた。

やっぱり、こういう展開は何処の世界でもお決まりなのかも知れない。

「僕か？」

「他に、誰が居るってんだよー」

「それもそうだね」

さて、ここで僕の名前を教えるべきか、ここで僕の名前を名乗って去るか、ここで僕の名前を名乗らずお暇（いとま）するか。

などと、考えたところで、変に思われるのは嫌だ。

今更だが、もう少し普通に思って欲しい。というのが最近僕の願望になりつつあった。

ま、名前程度なら名乗ってもいいだろう。

「僕は――――嘉音」

「かのん？」
「神沢嘉音。僕の名前だ」
そう名乗った。
「嘉音嘉音嘉音・・・・」
復唱されている。
呪われていそうだ。
「ああ、オメェってさ、いっつも柊たちといる奴じゃね？」
柊？
ええっと・・・・・・・・
ポクポクポクポクポクポクポク・・・・・チン
などという、昔じみた音は鳴らずに、僕は思い出した。
柊といえば『かがみ、つかさ』の事だった。
ああ、『柊姉妹』のことか。どこやのどいつかと思ったら。
「まあ、そうだけど・・・・」
「やっぱりかー」
「やっぱりなのかよ・・・・」
「柊がさ、よくお前の事話ってからよー。不思議というか、人間離れしているというか・・・」

人間離れって言われたの初めてだ。

「僕が人間から如何離れているというんだよ。僕は改造人間か？」

「いやいや、そういう意味じゃねえんだけどよ。柊がいうに、珍しいって奴らしいぜ」

「知らねえよ」

「でさ、こんな事訊いて悪いんだけどよ、お前って柊の事が『好きなのか』？」

「ちょ、ちょっとみさちゃん・・・・」

大型大胆爆弾発言炸裂。

一般の感情を持つ人間ならば、顔面赤くしてあたふたするという想像がとれた。

だが勿論僕の答えは――――――――――――――

「好きでもないし嫌いでもない。数字で表すなら、『好きが零で嫌いが零だ』。大雑把に言えばどうでもいい」

――――――――――――簡単な答えだった。

それ程僕に感情変化はないからだ。

好きとか嫌いとか、面倒な感情だ。一々気にしていては身が持たな

い。

「ふーん。やっぱりそうなんだなー」

知っていたような口振りで、彼女はいった。

「変わった奴だって、柊は言ってたもんなー」

「変わった奴・・・・・ね。まあ、そうなのかもね」

トレーをもって、僕は立ち上がった。

「？何処行くんだー？」

「ここにいつまでも居るんじゃ、耳が痛いからね。五月蠅いのは大嫌いなんだよ」

そういい残して、僕はその場を後にした。

『東食堂』をでて、行き先は特にない。

教室は五月蠅いので、一先ず静かなる屋上へ、僕は移動した・・・・・のは、大失敗だった。

屋上＝不良の溜まり場。と考えたことがなかったので、僕は大いに失敗してしまった。

不良が、５人ほど輪を作って、塵を散らかし、タバコを吸って、紫煙を吐いていた。

路地裏とか行けよ。と僕は思った。

「あ？何だテメェ？」

行き成り来るなり睨まれてガンつけられた。

「誰だっていいだろ？」

「はァ？」

全員立ち上がって、近づいてきて僕の周りを囲む。

「名前訊いてンだって、言ってんの、わっかんねェの？」

一人の奴が顔を近づけて、煩躁（うぜえ）。

さて、なんと反応しよう。

いや、それ以前に面倒だ。

あ。でも・・・そういえば、試してみたい事があったんだった。

「何か言えや？」

まずは、短気の輩から・・・・

「じゃあ、くたばりやがれゴミ蟲」

「ああん！？」

うわ。血管が浮いてる。

「嘗めてんのかテメェ？」
「まさか。物凄く馬鹿にしているんだよ。馬鹿者ちゃん」

ブチ

重圧も篭らない淡々の怒りの篭った拳が、飛んでくる。

それを見ながら僕は予想通り、跳躍すると、３m上空で少し滞空して、不良の背後数m先に一回転すると着地した。

「（ふうん。試してみたけど・・・人間の怒りって結構沸点が低いんだな・・・）」

そう、僕の試したい事は、人間の沸点。つまり『怒りゲージ』についてのことだった。

普段見慣れない姿を、怒りを与える事でどれだけ変化するかというのを、僕は試してみたかった。
やはり、不良は短気だ。

面白いが、人を大いに侮辱しなければならなかった。

故に、後が面倒だった。

売った喧嘩を相手は買ったのだ。だから僕は、対処をせずには居られないのだ。

「うおおおおおお！！！！！！！！！！！！」

おお、怒涛というものは大嫌いだ。耳に劈く。

「というわけで」

そういいながら、屋上の境界線であるフェンスの上へ、軽く跳躍して乗った。

かしゃんと音が鳴る。

フェンスの高さは軽く５ｍはあった。足場は数ｃｍしかない。

「おら！テメェ！降りてこいや！」

そんな、『殴って殺るから降りて来い』みたいに言われて、降りてくる奴じゃないぞ。僕は・・・

だが、それが通じるわけでもなく、フェンスを揺らしてくる。

非常に危ない。

だから僕は、あえて後ろに跳んだ。

勿論その先には、ガラスの足場があるわけでも、透明な光の床が現れるのでもなく、数十ｍの落下が待っているのだった。

下はアスファルト。落ちたら絶対死ぬ。

普通なら。

僕の体が、急降下する。校舎からはフェンスを蹴ったせいで数mもの間がある。

手を伸ばして届く距離でもなければ、ましてや、ロープか何かがあるわけでもない。

僕の体は重力に従い、落ちる。

体をバク転させて体制を一瞬で直すと、そのまま足からアスファルトに着地する。

軽い地響きが鳴り、アスファルトに軽い罅が入って、着地したときに発生した衝撃波で、石が浮き上がった。

僕の足の骨は、衝撃を伝える前に皮膚に吸収された。

「危なかったー」

十分あぶねえよ。と声が聞こえた気がする。

チャイムが鳴って、昼放課が終了する。

僕はさっきのことを何事も無いようにさっさと教室に戻って午後の授業を受けた。

放課後。

「帰ろー」

何時もどおりに、彼女たちが、僕にそう言ってくる。

「ああ」

僕は小さくうなずくと、立ち上がった。

鞄を手に持ち、僕等は教室を後にした。

何時もながらも、僕は、こなた、つかさ、みゆきと並んで歩く。

「かがみは？」

何時も入るかがみがいない事に僕は疑問を抱いた。

「さあ。でも、お姉ちゃんは今日は用があるって言ってたよ？」

「あっそ。じゃ、仕方ないな。さっさと帰るとしよう・・・」

僕は一歩を踏み出した。

何か、予感を胸に考えながら・・・・

肆話～いつもの日常一～（後書き）

今回は少し普通な感じに書いてみました。

意見、感想、助言待ってます。

伍話　（前書き）

やっとの事で更新です。長らくお待たせしました。

どうぞみていってください。

伍話

5月27日。

僕の始めての、記念すべき日・・・・・・・・・・・・では無いのだが。まあ、初めての事

今日も晴れ渡り、蒼い空が広がっていた。

清々しい奴は更に清々しく五月蠅くなり、僕は何ら感慨のない感覚で、目覚まし時計の甲高い音に叩き起こされた。

窓から差し込んでくる朝の光に目を焼かれながら、ただ「ふわぁ～」と欠伸をするだけだった。

掛け布団を退け、立ち上がる。

それから、目を擦りながら、カーテンを開け、それから窓をあける。そして、ベランダに出ると、掛けてあった洗濯物を取り込み、網戸を閉めて中に入った。

洗濯物は朝は時間がないのでどうしようもない。なので、ハンガーをつけたままそこら辺に放る。

台所へ足を運ぶと、トースターにパンを突っ込んでスイッチを押し、焼ける間に僕は制服へと着替える。

制服は私立校のくせして学ランで、僕はベストが良かったなぁ・・・・・・・・などと考えることがあった。

冷蔵庫から、マーガリン。台所の引き出しからナイフを取り出して、皿を一枚棚から取り出した。

そして、焼けたトーストを皿に乗せ、ナイフでマーガリンを掬ってトーストに塗りつける。

無言のまま薄型液晶テレビをつけながら、トーストを頬張った。

『今日のニュースです。神奈川県羽田ノ市で、深夜未明、殺人事件が発見されました』

綺麗に映る画面の中でＡ４の紙束を持ったニュースキャスターが淡々と、他人事のように喋る。

『今日深夜未明。当時６９歳の男性、『木村　勝司』さんが、家内で解体死体で発見されました。発見されたのは朝方の５時ごろで、隣に住んでいた『吉村　壽』さんが、異臭の臭いに気付き警察へ通報したところ、見つかりました。犯人は現在警察が目下捜索中ですが、家内の押入れから血の着いたチェンソーが捜査をした上で見つかりました。警察は犯人の物と見て捜査を進めています』

「・・・・・・」

朝っぱらからとんでもねえ話（ニュース）を聞いてしまった。

今日も世界は平和ではないことが分かった。

解体死体って怖いな。しかもチェンソーって、どんな狂乱者だよ・・・それともただの殺傷症候群（さつじんびょう）なのか？

とことん世界は巫山戯ている。

いや、世界は実際巫山戯てはいないけど、人間が思いっきり容赦な

くへったくれもない畜生どもなのか？

っていうより、本当に殺傷症候群なんているのか？

とりあえず、今週の天気予報だけを聞いて、さっさと飯を食い終わると、僕は家を出た。

僕の住んでいるアパートは3階建て。

部屋を出ると3階に住んでいる『桐島　美香子』ちゃんと、バッタリ出会った。

『市立伊里島中学校』の、ブレザーの制服。

肩までの三つ編みされた黒の髪。

それなりの美人で常に無表情が合う顔で、じっと僕を見つめていた。

そして

「おはようございます。神沢のお兄さん」

ぺこり　と僕に頭を下げて挨拶した。

「おはよう。美香子ちゃん」

普段同い年や年上の人には僕は　ちゃん　付けなどはしないのだが、彼女にはちゃん付けをしている

「突然ですが、神沢のお兄さんに質問です」

変わらない音程で清々しく美香子ちゃんは言った。

「神沢のお兄さんは、好きなものがありますか？」
「？」
「昨日、国語の授業で出た作文でそういう題名がでたので、参考にしようかと思いまして・・・」
「ああ、なるほどね」
宿題ね。作文と来たか。高校ではそういうことは無いんだけれど・・・
「ではもう一度訊きます。神沢のお兄さんは、何が好きなんですか？」
僕はその問いに即答した。
「好きなものなんてないよ。そんなものに興味も無いよ。一々考えている奴は、暇人だからね。因みに僕は暇人では無い。僕は基本的休日にはゴロゴロして何もしない人間なんだ」
「あの・・・・人はそれを暇人と呼びますよ？」
「・・・・・・」

言い返す言葉が出なかった。
さて、話を泥水に棄てるが如くに話を逸らすが。
僕は二階に住んでいる。
だから何時も階段を下りて、駅まで歩く。

いつもバス停のある『糟日部駅』とは、ここ『大宮』から、結構な距離があるので、勿論電車を使ったほうが楽に行けるのだが、僕はあえて歩いてゆく。

勿論半端ない距離で、精々伍十分はかかる。

しかし、毎日歩いているせいか、既に慣れていた。

携帯の時計を見る。現在７時５０分。

登校時刻は８時３０分が期限。

家を出たのが７時半。

後３０分歩くと、８時２０分ギリギリのバスに乗れる。全力疾走するのであれば、残り１０分で着く。

疾走したら結構疲れるけれど・・・まあ、３分で疲労は回復する。

全く一体全体如何言うことで、こんな体なんだろうな・・・今のところ、それが如何してなのか、痕跡も考えも見当もつかないのだろうけれど・・・

バス停までの道のりである、街中の角を折れてからそう呟いた。

というふうに、朝はこんな感じで、僕は過ごしている。
これは何時も通りなので、特に気にするのではなかったが、今日が多分いろんな意味で苦労する日だとは思いもよらなかった。

ーーー

記憶喪失の生徒ではないけれど・・・・

「っつうか、僕は記憶消失者だけど・・・・」

一言ぼやく。

そして席に座るなり、彼女(ともだち)たちが来る。

いつもように変わらず・・・・・・いや、それは違い。こなたがやけに上機嫌だった。

何時も変わらず内心で何を企んでいるのかさっぱりもって掴めないので、いろんな意味で怖い。

怖いというより、なんだかとてつもなく嫌な予感がする。

何も訊かない方がよさそうだ。というよりも、この上機嫌な顔が、何時も通りのニヤニヤとしてニヨニヨとして、「ムフフフフ」と内心で気味悪く笑っているような不気味且つ気色悪い顔になるまで、何も言わない方がよさそうだ。

蜂に刺激を与えないと同じように変に刺激を与えないようにしなければ。

「やふー」

「ＹＡＨＯＯ？それは挨拶に入るのか？」

まず最初の下らない挨拶を終え

「嘉音君おはよう」

「ああ」

「神沢さん。おはようございます」
「うん」
僕は机の中に荷物を入れながら、挨拶を交わした。
いや、挨拶か？今の？

「ねえねえ、嘉音君。明日って何の日だと思う？」
「えーと、週に一回のゴミの日。ちゃんと出さないとな・・・」
「・・・・・・」
「あれ？違ったか？はて？明日だっけ？明後日だったような・・・・・・・・あれ？うーん仕方ない。看板を見るとしよう」

しぶしぶ、僕はそれで解決することにした。
結構、ゴミ袋もパンパンになってきた頃だ。
丁度いい頃合だ。

「んで？僕にそれを訊くという事は、明日は何か国民記念日かオタク的なイベントでも開催するのか？」
無難ではないが、そう訊くしかなかった。
機嫌の事はあえて触れないようにして・・・・・・

「いや～」
とぼけ顔で答えるこなた。
やはり上機嫌だ。

さて、何故こんなに上機嫌か少し考えてみよう。

何故こうなったのか考えれるとしたら、何か好い事でもあったのか、よほど好い物でも買えたのか、はたまた、何か楽しい出来事に胸を鳴らしているのか。

こいつに付いて考えれることは沢山だ。

大抵ゲームやギャルゲやエロゲで狙っていたものでも買えたのか、それともネットゲームやらでいいレア物でもゲットしたのか・・・

・・・・・・・・・・・・。

いや、この場合小さすぎてここまで上機嫌には成らないよなあ・・・・

では、明日何かがあるのか?それなりな大きな出来事でも・・・・・・・・

っつうか、そこまで大きな出来事なんて学校着て早々起きるとか言われても、僕の処理能力的に、キツイぞ。

対処も出来ねえ。

やっぱり本人に訊いた方が良いのかも知れないけれど、厄介に入り込んで面倒なことをやらかすのは好きじゃないし・・・

でも、そういうことって感情経験にはなるだろうけれど、生憎それはしたくない。

まあ、自然にしていれば、あっちから何かいうだろうな。

僕は何時も通りにすることにした。

「嘉音君は何時も通り不健康そうな顔をしているね」

「僕は何時も健康だ」

誰が不健康だ。

風邪だって引いた事はないぞ？

「お前は今日も外見の何一つ、何一つ成長も変化もなく、一切変わらない。いやらしい顔だ」

お返しに一言放つ。

さて、ここまで来ると益々分からない。

こなたのこの上機嫌の元が明日の何かに関係しているというのは、こなたの発言で分かるのだが、しかし、それが一体なんなのか？全く持ってさっぱりこってりむっちりもっちり分からなかったりする。

だが、分かったところで、意味はないと考える方が良いのか？

まあ、必死になって考える必要もないわけだし・・・・若しかしたら個人的なことかもしれないし・・・・僕が口出す場ではないかもしれないな・・・・

無駄な詮索と、面倒な詮索はよしておくとしよう。危険回避だ。

「おーい、神沢ー。例の宿題。『黒井っち』が持ってきてー。だと」
学級委員の二人目である、名の知らぬ人がそう声を投げてきた。
「ん？ああ」
僕は、机の中のノートを引っ張り出し、そいつに渡した。
ちなみに『黒井っち』とは、『黒井先生』のことで、年差も関係なくそいつはそう先生を呼んでいた。
若しかしたら、生徒の間では通称なのかもしれない。
「全部やったのか？」
「まあ。一応」
一応なので、全部出来ているわけで、まあ、そこまで頭のよくない僕は一応がつくのが当たり前だったりする。
「泉さん。あんたは－－－－－－－－－－－－まだ提出して・・ねぇよな？」
「あ、ごめーん。私まだ出来てなくって・・・」
「ああそうかい。黒井っちに怒られるけれど、俺っちは知らねえぜ」
そう言って、去ってゆく。
気分的に。空間空気的に。僕は忠告も加えて
「なあ、こなた。宿題をやらなければ拳骨を食らうと数日間前に、味わったばかりじゃなかったのか？」
「いやー、私もやろうとは思っているんだよ？でもこっちには色々事情が「－－－－－－－－－－－－

えだろ」ううぅ～・・・・・・・・・・・・・・」

僕の言葉に言葉をなくすこなた。

「『事情』って言っても、お前の場合。大抵ゲームで潰したことだろ？言い訳には成らないんだよ。そんな戯言。事実お前がマトモな事情を話した覚えがここ数ヶ月間で僕にはない」

「むう～・・言い返したいけど言い返せないね・・・・」

だがそれでも、彼女の顔から上機嫌は消えることが無く。

それは授業でも同じで、1時限といい、2時限といい、変わらずに気味が悪かったのは、僕だけなのかもしれないけれど、少なくとも隣の男子が気味悪がっていたのは、見るまでもなかった。

あまりにも、それ程に何か上機嫌なものがあるのか気になり、密かにみゆきに訊ねた所

「たしか、明日は泉さんの『誕生日』だったとおもいますよ？」

「『誕生日』？」

「ええ。それであそこまで上機嫌なのではないのでしょうか？」

「ふーん。誕生日・・・・ねえ。確かそんなものがこの世には存在していたな・・・」

なるほど。誕生日ね。

家族から好きなものが買ってもらえるだろうし、たぶんかがみたち

で小さな誕生日パーティーでもするだろうし・・・
その他楽しいこともあるだろうし・・・・まあ、それならあの上機嫌も納得できる。

「あいつがあそこまで、誕生日を大事・・・っつうか楽しみにする理由は娯楽があるからだけなんだろうね・・・後味は悪いのに・・・」

明日。つまり２８日。誕生日。

「なあ、その日ってお前達は、誕生パーティーでもするのか？こなたの・・・」
「え？あ、はい。明日かがみさんたちと・・・今日はプレゼントを買いに、街に行くんですが・・・」
「へー」
「神沢さんもどうですか？」
「は？」

話しを振られた。

「えっと、つまりー・・・・僕もこなたの奴に何か買えとでも？」
「はい。折角の機会ですし、親睦を深めるのに丁度良いのではありませんか？」
「いや別に・・・これ以上親睦を深めてもしょうがないと思うけど？えっと、でも僕プレゼント選びなんてやったこともないよ？アイツが欲しがる物なんて、僕が買い得る区域にあるのか？大体、相手が普通の女の子だったとしても、そういう経験が僕にはないし、喜ぶものを買ってあげれるのか？」

最初の難関とも言えるプレゼント。僕にはそれが問題だった。

相手が、こなただ。

何か喜びそうなものは、一般のものであえばブレスレッドとかか？首飾りでも良いだろうし・・・いっそ簡単にお菓子でもプレゼントするか？

ＰＴＡで配っていたような袋に入っている奴・・・

いや、かがみじゃあるまいし・・・お菓子プレゼントして喜ぶ、低脳な餓鬼でもないだろう。

まあ一応、こなたも、女の子（矮躯で小さく子供のような体格で今でもランドセルを背負えば十分小学３～４生見える奴だが）である。

しかし精神年齢は１７である。

「でしたら、私たちと一緒に来ますか？」

「え？いいのか・・・？」

「どの道買うのでしたら。私たちもフォローしますので・・・」

「じゃあ、お願いするよ。僕一人じゃ何を買えば良いのかさっぱり解らないしね・・・あ、でも・・なんかなあ」

「？どうなされたのですか？」

「やっぱり、止めとく。自分ひとりで、やってみるよ」

僕はそう、何となく言ってみた。何をプレゼントしたら良いかはさっぱり解らないが、何とかなるだろうと考えて、断った。

「一応考えがあるからね」

実際何も考えてないけれど・・・・・・・・・・・・僕は自ら進んで解っていたかのように言った。

自ら進んで嘘を吐いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

昼放課。

今日は『購買』へ、早めに足を向けた。

今回は考え事があるので、購買でパンでも買ってこようなどと思い、足を向けたのだ。

考えるべきことは、こなたへのプレゼントだ。

全く如何したものかな・・・

ブレスレッド？耳飾？首飾り？ネックレス？

全く、本当に如何したものかな・・・

まあ、今日が終わったら、糟日部辺りのデパートとかで、探してみるか。

アイツには・・・・首飾りは邪魔だろうし・・・ブレスレッドが良

いか？

うん。そうしよう。深く考えるほど請ってしまうのが僕の尽きだ。

なるべく簡易なものがいい。下手したくないし・・・

そう考えながら、購買でパンやジュースを購入し、どんなものを買おうかと思いながら、屋上へ上った。

それが意外に長く感じた。

考え事をしながら上っていたから、長く感じたのだろうか？それともただの気のせいだったのだろうか？

ブレスレッドを買うのは良いとして・・・どんなものを買えばいいのかはさっぱり分かったものじゃないな。

想像力の低い僕には、ファッションセンスというのがまるで皆無だからなあ・・・あいつがブレスレッドをつけたところで、似合っているかどうかも分からない。

そもそも、お洒落などという、『飾（じゃらじゃら）』したものは嫌いだった。

指輪にネックレスやイアリングや、髪の脱色や染め、刺青、そういうものは、嫌いだ。

一生したくない。

でも、それは無理だとは思うけれど・・・

僕はその後、昼放課を全般使いプレゼントの回想に浸っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「混雑しているな・・・いや、これが普通なのか？」

結局何も決まらないままで、来てしまい。現在は糟日部市どっかのデパートにて、僕は足を進めていた。

人ごみがうじゃうじゃと蠢き、騒がしいＢＧＭ（おんがく）に、婆や爺、もしくは若いギャル成人たちが、ベラベラと機械のように適当なことを喋っている空間を僕は歩いていた。

何気に背中に変な違和感が持てる気がした。

やけに濃いものだった。

実はいうと来るのは初めてだったりするのだが、想像以下だったので、迷うことなく目的場所に辿り着いた。

エスカレーターで３階へ。そこから数分歩くことで、何と言えば良いのかわからないが、それらしい場所に辿り着いた。

言っておくが宝石屋等でもなく、なんだかお土産や的な感じの店でもない、なんともいえないグッドな店だった。

「へえ。いろんな物が売っているんだな。それなりに高いものは無いし・・・」

４桁程度の商品が数々に並んでいる。

ブレスレッドが並ぶ商品売り場へ他の商品を見ながら移動した。

さて、こなたに似合うものは・・・一帯どれなんだろうな・・・

星型の石が、丸い青色のガラスの玉と連なったものや、緑の石が四葉のクローバーに削られ連なっているもの。

どれも４桁の値段だが、全部よいものだった。

だが、ファッションセンス　というものが僕には良く分からないので、商品を想像上でこなたに当て嵌めても、何が良いのか分からない。

迷わない方が良さそうだと、僕は判断し、目に付いたものを手に取った。

綺麗に彫られた星型の透き通るような青さを持つ石が連なったブレスレッドであり、何となく似合いそうな気がして取った奴だった。

『２５００円』

値札にはそう書かれていた。

僕はレジまで、もって行き、会計を済ませた。

「これで、ミッションコンプリートって奴か・・・明日は渡せばいいだけの話しだし、さっさと帰るか・・・」

僕はそう言いながら店を後にすべく

店を出てエスカレーターで、下りようと思ったのだが、何気なく喉が乾いたので、自販機で適当なものを買う。
それを飲む為、ベンチに座ろうと思い、傍にあったベンチへ腰を下ろした。

炭酸の入っている飲み物なので、なるべく丁寧にふたをあける。一気飲みすると舌が痛いので少しずつ飲む。

と、左に違和感を抱く。

僕の隣には、何時の間にか、一人の男性が座っていた。
気配もなく、無断で、無口で座っていた。正面の店を見つめていた。
得意げそうな上から目線をしそうな顔に、銀縁の若い者が好んで使うような眼鏡を掛け、赤く染められた髪がだらりと垂れ肩に付いている。

紫色に染まったイアリングがデパートの天井から差し込んでくる光で眩く醜く光る。

首から垂れる髑髏首飾りや鳥の羽を使用した外国系の首飾りがゆれる。

緩々のボートネックの上にヘンリーネックカットソーを着重ね黒いスキニーを履きこみロングブーツが脛から伸びている。

そんな服装をした一般人だったが、まるで一般人には感じれなかった。

「ねえ。君は真実を知るかな？」
突然とっさにそんな言葉を発した。
誰に言ったから分からない。
何かを得意げる様に魅惑的な声だがその声は状況によって最悪になる声でもあった。

見るところ、まるで僕に言っているようだった。

「聞いた事は信じない。見たものはそれは必然だから信じる」
「おっと、意外な答えだな～。うふふ」

不気味な人だった。

「あなたはなんなんですか？」
「ん～私かい？そうだねぇ～研究者とでも言っておこうかな」
「では、研究者であって研究者ではないのですね・・・そのいいようだと・・・」
「じゃあ、放浪人かな？」
「それにしては、大きな荷物もないですね」
「じゃあ、テロ組織の人間」
「衝撃告発にしてはさっぱりしてますね。それと、そのテロ要員が、ここで一体全体何しているんですか？」
「じゃあ、預言者か占い師だ」
「では、後数ヶ月後に行われるオリンピックの水泳でどの国が優勝するか当ててみてください」

「君は容赦や遠慮は無いのかい？」
「ありません」
きっぱりと僕は言い張り断言した。
「ところで、話がそれますけど・・・・・・・・あなたですね？『このデパートに入ってから僕を着けていたのは』」
「うふふ。鋭いね君・・・武術でもやっていたのかな？」
「いえ。武術はただの心得に過ぎませんよ。同じように武術の技なんて、足運びに構えと繰り出す方法さえ分かればただのものに過ぎませんし、それに、武術程度で殺意や殺気か違和感を感じ取れるようになるんですかね？『実践』もないのに・・・・・・」
「うふふ。中々の哲学だね。神沢君」
「・・・・・・」
この人。僕の苗字を知っている。
いや、神沢というのは既に、僕の名札に彫られている苗字だ。
そんなものは見れば分かる。
名前を知らなければ、僕を知っている人物ではなさそうだ。
「君は理論は卑劣な言葉しか吐(ぬ)かさない様だねぇ。駄目だよそんなのじゃ、すぐに友情なんてものが解れてしまうよ？それが君の一番いけないところだ。おっと、別に何も知らないでベラベラ駄弁っているんじゃないからね？私はただ君が興味深いだけだ。１００００人に一人の欠陥製品だからね。でも、そう言ってしまうと少し酷いかな？ふふふ。でもそうでもないようだね。幾ら私が口言葉という戯言(たわごと)や無粋な暴言を吐こうと君は表情一つさえも変えないようだね」
「・・・・・・・・・・・・・・・何時から僕を知っているんです

か？」
「うふふ。君の事は知っている。実に興味深いからね。『ＨＥＰ（エイチイープログラム）』に在籍してた頃より前から知っていた。もう、１７年も前だけどね。いや、１７年前に、やっと知ることが出来たとでも言うのかな？」
『ＨＥＰ（エイチイープログラム）』？
何の略だ？
そして１７年前やっと僕を知った？
何が如何いうことだ？

「ところで、あなたの名前を訊いていなかったのであえて訊きますが？」
「いやいや。別に私の名前を覚えてもらっても困るのだがね。それよりも名を訊ねる前に自分の名を名乗るのが礼儀じゃないのかい？」
「そんな礼儀は既に江戸時代に絶滅したはずですが・・・？」
「全く。今の若者は全員こうなのかな・・・・・私の名前は『空咲（そらさき）　双水（ふたみち）』だ。以後宜しく頼むよ。ちなみに歳は２７だ」
「以後と言っても今後会いたくありませんけどね。『僕の過去を知っていようと・・・ね』」
「うふふ」
僕は炭酸ジュースを飲み干すと、その場を後にした。
彼は僕に視線を向けながら、ベンチに座ったまま何事もなかったように、再び前を向いた。

デパートから出て僕は空咲さんのことを考えていた。
彼は現在からほど17年前つまりまだ幼い7歳の頃に僕を知った。
如何いう意図で知ったのか分からないが【HEP】という【何かのグループ】に、7歳で在籍できるほど能力がある人なのだろう。

そして何より、何故僕の話が持ち上がっているのか分からない。

彼が一帯『研究員(ぜんしゃ)』なのか『研究者(こうしゃ)』なのか、どっちにしろ、今後気をつけたほうが言いというのは僕の心の中では、当たり前に感じていた。

彼は絶対疑わなくてはならない。彼は絶対何かを知っている。
僕の家族のことも、いまだに生きている妹のことも、知っているのかもしれない。

更には僕の正体と本名も・・・・・・・・・・

だけど今は、そんな壹年後の話かもしれない事より、ほぼ抹消しか

けていたこなたの誕生日のことを考えなくてはならない。

考えることは沢山有るけれど、大して急いで考えるものでもなさそうだ。

明日本当に如何しようか。というより、どうやれば良いのかそっちを考えた方が良さそうだ。

全く如何したものかな・・・

伍話　（後書き）

助言感想意見待ってます。

次の更新も未定です。ごめんなさい

六話（前書き）

更新です。待ってた人ぜひ読んでいってください。

六話

僕にとって友情関係はあまり些細なことではなく、一言で言えば大問題に匹敵するのかもしれない。というのは幾らなんでも言い過ぎのような気がするけれど、しかしそれが正解に値するのかも知れないし、または間違っているともいえる。

実際のところここ1年数ヶ月間（でも、数ヶ月というほど経っていないが、それだけ経験している気がする）で、４人の友達が出来た。

いや、なんか出来た。だ。

僕の場合、高校入ってからの過去が一切頭の中に記憶していないという、珍事な現象があり、『記憶が無い＝人生経験がない』わけで、友達が出来ることで沸く友情という経験などあるわけなしで、４人の友達が出来たことで僕にとってそれは、やっぱり大問題でもあっただろう。

友達が出来る前は、普段から、人間関係というコミュニケーションを考えてヒジョーに難儀していた。
だからこそ、まずは近所関係的なことから始めようと思ったので、始めたわけだけれど、まあ、普通に出来たし少しながらの人間関係は気付けたわけだけれど、でもなれないことも多かった。

そんなときに限ってなのか、僕に行き成り友達が出来ることは、ご近所関係という形から一気にＬＥＶＥＬアップしているわけで、いまだに僕はその環境に慣れきっていない。

というわけで、

伍月貳拾捌日（ごがつにじゅうはちにち）。休日にして男友達ではなく女友達の誕生日だった。

僕は先日購入したばかりのブレスレッドを持って幸手駅へ既に電車から見える風景を堪能しながら向かっていた（因みにゴミの日が今日だったので朝のうちにゴミ袋は出しておいた）。

景色を堪能するのはいいことだ。

いっそこのまま何処までも行きたかったが、流石にそれは友達を裏切るような行為なので、遠慮した。いや、普通は遠慮するな。

というよりも帰ってくるのも面倒だったりする。

それよりも、プレゼントの事はどうすればいいのだろうか？

初めてのことなので、何をしたらいいのかも、分からない。いっそ誕生会が終了時に帰り様に、「ほれ。やる」とでも言えばいいだろうか？

全く如何すればいいかな。

このままだとなんだか、気が引かない。

まあ、友情関係で僕は冷めすぎている為、結構話の内容が暗かったりするが（作者の所為だけど・・・）、まあ僕がボケでも披露して大いに突っ込ませるのもありだけれど（でも、そんな内容の小説を書いているわけでもないだろう。あくまで自己満足だ）・・・

冷めすぎている分盛り上げてくれるあの四人組の一人に対してのお礼とでも言うところだ。

今出来る精一杯のお礼だ。

テンションが低いしょぼい僕からのお礼だ。

変なお礼だな・・・

「喜んでくれるといいんだけどなあ・・・」

自分が買ったとはいえ、そういうものをあげるのは抵抗感と違和感がある。

あいつは、人から貰った物にケチをつけるような奴ではないと思うけど・・・・・なんだかな。と思ったり。

しかし本当にこういうことをするのは初めてだ。

去年は、全く持って何事も無い様な普通且つ平凡で何もしなくても生きて行ける様な日常を送っていた。

上の階の人たちや下の階の人たちと、幾らか関わりが会ったがそこまで仲良しってわけでも・・・・・あったよな。

かなり楽しく話したときがあったのに、友達という言葉が頭にはなかったような気がする。

いや、友達だと思っていなかったのだ。身近すぎて、分からなかったのだ。

学校で親しくなった者だけが友達としか思っていなかったのだ。

ただ、簡単に、僕の考えが浅かっただけだった。

これ聞いたら、美香子ちゃんがショック受ける確立は１００％だな。

一番仲が良かった気がする・・・物凄く酷い毒舌された覚えがあるけれど・・・・・・・・

そろそろ僕も男友達程度は作らないとな・・・

そんな風に、とやかくしているうちに駅に着いた。

電車から降りホームを歩き、階段を上って改札を通り、さてどうやってこなたの家まで向かおうか？などと思いながら、足を進めた。こなたの家が何処に在るかなどは、前もって住所をかがみたちに聞いて置いたので、如何いう風に行けば良いのかは、分からない。

つーか、急いでいくところでもなさそうだな。見るところこら辺は田舎だし・・・住宅も少ない方のようだ。

結構良い所だったりするのだが、もし僕がここに住んでいるとして毎朝こなたと一緒に登校するとなると、たぶん精神的に何かが持たないのかもしれないし、彼女にしたって僕との会話は凄く、物凄く、飛翔するほど会話になるはずがない。

たぶんほぼ無視するのが僕だろう。

あいつの会話内容に寧ろ僕が着いて行けてないので、多分無視するのではなく黙して黙りたくなるだろう。

耳に蛸が出来るかもしれない。

さて

ここが何処なのか如何いう風に説明したらいいのかわからないが、田舎だ。
田圃があり淡々と道が広がっていて、ふと横を見れば田圃の淵っこに、よく子供が木の枝で抉る蛙の卵があったりする。

しかし、生物学の授業で蛙の卵について勉強はしたけれど、何故あんなふうなグロテスクな卵なのか、世界の法則は不思議だった。
何が元であんなふうな、卵にしたのだろう？

いや実際卵の形は良いとして、それを包んでいるこの透明なものは一体何なのだろうか？

若しかしたら、蛙を魅了する精分でも、入っているのだろうか？
僕のような人間にとって最悪な物体だけれど・・・

もし、生物を創造した神様が蛙の進化の過程で、このような形をするようにしたのであれば相当嫌がらせ野郎だったに違いあるまい。
誰もが見てもいい風な形にしてほしかった。

蛙を見た人が嫌がるのを想像しなかったのだろうか？

自己中心的な奴だったのだろうか？

なににせよ、蛙といえば昔のインド人は蛙の肉をカレーに入れて喰うという話を聞いたような気がする。

お目にかかりたくねえな。いや、お目にかかりたくもねえ！
お目にかかったとしてもぜってー喰いたくねえ！
蛙の肉なんてぜってー喰いたくねえ！
つーか、蛙なんてもともと嫌いだ！あんな両生類！
それからは田圃の蛙など無視し、泉家へ足を進めた。
何も余計なことを考えず足を兎に角進める。
兎に角足を進めた。誕生日という障害物を越えるように、足を進めた。
暫く歩くと住宅街に入った。
古くも無ければ新しいともいえないような街が広がっていた。何処とも変わらない風景だった。
住所を思い出しながら足を進めた。
無駄に広そうな道路の角を折れ、無駄に広い道と前言撤回するような半分以下の道があった。
そのすぐ左側に、泉家が在った。
「ここか。へえ。意外に良い家に住んでいるんだなあ」
感無量で僕はぼやいた。
なんと言えば良いのかわからないけれど、確かこなたの家族は母親

が他界しているから、こなたとお父さん2人暮らしなんだよなあ。
泉家は意外に大きかった。意外というか暮らしている人数を考えれば、大きかった。否。大きい方だった。
人数が3人といえば、普通だ。

そう思いつつ、インターホンを――――――――――――押そうと思った

が・・・押さなかった。押せなかった。押そうと思ったが押そいとどまった。

いや、全部撤回して言い直せば、押そうと思っていたところに、バッタリ待ち合わせるように、3人組に会った――――――だ。

「へえ、あんたも来てたの？意外ね」
「・・・・・・まあ」

なにか言い返したいところだけれど、日頃の状況から見て僕が人のために何かをしようなどという行動をしていない為、その【意外】という言葉から抜け出せなかった。

さて、なんと反応を返したらいいだろうか・・・本当に困るのだけれど・・・

「てっきり、来ないものかと思ったけど、本当に意外ね。興味なさそうっていうか・・・面倒だから絶対に来ないものかと思っていた

けど・・・」

どうやら、僕は彼女からして・・・いや、大抵の人間からして低評価されているというか、マイナスな存在らしい。

つまり、テンションを下げるのには丁度良さそうな人物であるようだ。

間違っては無いのだけれど・・・結構ひどい言いようだった。

前にも同じことを言われたような気がする。

「確かに、面倒だけれど、でもこういうのって、やっぱり来るべきだと思ったんだよ。自分なりだけれど、やっぱり僕も一人の友達だしね」

今迄、そんな事を言える僕ではなかったけれど、そういうのは大切なのかもしれないし・・・だからこそ、言わないといけなかったのかも知れない。

「つーか、みゆき。あんたって教えなかったのか？」

「いえ、お伝えしようとしていたのですが、あえて泉さんだけにお伝えしておきました」

なんでだよ・・・

「・・・あんたって、本当に読めないっていうか、変な奴よね」

「・・・・・・・・・」

まあ、僕は変な奴という存在に値するし・・・その言葉は最も当て

嵌る。

けれど、【何時までも変な奴でいよう】。とは思っていたりいなかったりする。

「変わっているというか。不思議って言うか・・・兆変人って言うか」

いま、発音からするに【超】じゃなくて【兆】が入ったっぽい！

なにそれ！？僕は二次元の人間じゃねえぞ！？何だその不思議外見的にも超絶の力を秘めた人間みたいな言い回し！？

最悪だ！

幾ら僕の体が異常だとは言っても、そこまで超人的なものじゃねえぞ！

因みに僕は超能力者の話が嫌いだ。縁起でもないし、碌でもない。そして何より絶対的な拘りだ！

勘弁だった。

なんて思いながら僕はインターホンを押した。

ピンポーン

と、定番？もしくは一般？なのかは僕も知らないがそれらしい呼び出し音が響いた。

まあ、一般的ということで・・・

五秒後。

「はいってー」

と声が出てきた。　そして切れた。

「・・・・・・・・・・・・」

今の対応はなんなのだろう。

勝手に家にあがれ。と言う合図なのだろうか？

僕がもしもピザ屋（ピザ屋とは限らないけれど・・・）の配達している奴ったり、訪問者だったら、物凄く対応に困るのだけれど・・・

もしそういうときがあったら一体如何するのだろうか？

完璧に無視するのだろうか？

「何しているの？這入りましょ」

「・・・うん」

僕は、門を空ける（木造だと思っていたが金属製だった）。

その先に玄関の入り口があり、そこまで来ると　がらり　と玄関の扉を開ける。

「「「おじゃましまーす」」」
「・・・・・・」
「おー、いらっしゃい」
パンダのTシャツ（ＫＯＮＡＴＡと書かれている）。半ズボン。特に変わらない小学生のような矮躯と容姿。青いの髪にクセ毛。呆けたような表情。
待ち構えていたようにこなたがそこには立っていた。
「うん、みゆきさんの言う通り、嘉音君も着ているね」
「まあね」
それとなく恍けるかのように僕は答える。
「兎に角這入ってー」
こうして僕らは、泉家に進入した。
部屋は二階にあるらしく、和風式（よく解らないけれど）な廊下を歩きながら、平凡に部屋へ向かうはずだったのに・・・
「こなたー、お客さんかい？」
泉父（こなたのおとうさん）が部屋から出現した。
あ、この人も青髪だ。そして短髪。無精髭。服装は・・・あれって

浴衣って言うのか？まあ、それっぽい服。
若しかして一家揃って青髪なのかもしれない。
身長は僕より高くて、予想だと百七十の後半。もしくは百八十。ってところだった。

「おじゃましてます」
取り合えずそう言うのが礼儀だと思い、挨拶した。
「君は・・・？」
その声とともに、険しい顔になった。
何か絶対やばい人に見える。
「ええっと、僕は神沢嘉音って言います。今日は、こなたさんの、誕生祝に着ました」
「ほう」
酷く偉そうな人だ。
つーか、なんでここまで僕は改めなければならないんだ？
嫁を貰いに来る人間じゃ有るまいし、こんな鋭利な視線を向けられる覚えは無いのだけれど・・・
僕は何かしたのか？
「そうかそうか・・・

・・・で？君はこなたのなんなんだ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・ぁ？」
今なんつった？
この人・・・意味解んねぇ。
なんなんだってなんなんだよ。
如何いう意味なんだろう？
そもそも　なんなんだ？　という時点で解らない・・・
「あの・・・言っている意味解んないんですけど・・・・」
「つまり、うちの娘とは如何いう関係なのだね？」
「・・・・・・」
そんなこと訊いているとは思わなかった。
つーか、初めからそう言って欲しいものだ。意味解んねぇっつうの・・・最初っから言えよ。
解り難いなあ。
でもまあ
「友達です」
と答えておくのが一番だろう。
そういうと、お父さんは――――――――――――

「ほおおお」

ーーーーーーーーーーーーーどうも逆効果らしく更に険しい顔になった。いや、してしまった。

うわあ。と僕は内心で声を漏らす。

世の中こういう意味不明で、感情変化する分からない人が溢れていたら嫌だなあ・・・何かもうこの人と話を続けたくないなー。

多分こういう人が、昔の軍の幹部とかの性格に似ているだろうなあ・・・。

さっさと、この人の目の前から消えたいけど、何しろ獲物を捕らえた猛獣みたいだし、逃げれない。

そして

「天誅！」

殴りかかってきた。

その行動に思考が一瞬真っ白になった。

僕だけではない、後ろの４人も声を上げた。

骨ばった塊が迫ってくるのに、僕は行動が一瞬遅れた。

「　うおおおおおぉぅぅぅ？？？？？」

ギリギリで避ける。頬を掠った。横を拳が通り抜けて行く。
もしも、これが刃だったら、僕の頬に深い傷が出来ていたはずだ。
僕は、反射的に跳躍し、身を翻して天井に手を突き反動で更に後退した。
着地して、様子を伺う。
そして、泉父は次の瞬間僕にとって、最高に意味の解らないことを言い放った。
「娘を狙う不届き者が！ここで成敗してやる！」
「はあ？アホかテメエ？」
暴言を吐いてしまった。
だがそんな些細なことはどうでもよく
ますます意味解んねぇぞこの親仁さん！
しかも、見知らぬ奴を何もしてねえのにぶん殴りに掛かって来るとは、一体全体如何いう脳の構造してんだよ！？
僕が警察だったら絶対問答無用で公務執行妨害で銃を突きつけてでも逮捕しているところだ。
この人、空咲さんと違う意味で、途轍もなくやばい人だ。
しかも、こなたの友達とか言うだけで、娘を狙う不届き者と酷く誤解していらっしゃる！

ロリコンだ！ロリータコンプレックスだ！

「ちょ、お父さん！なにすんの！」

「邪魔するな！こなた！今その悪い【虫】を成敗してくれる！」

酷い言い様だった。

悪い蟲とか言ってきた。

正直腹が立った。殴ってやりたい。

つーか、あんたが悪い蟲だ！と突っ込んでやりたいが、怒りをパワーアップさせてもしかたがない。

「あの――――――」

「だまれ！貴様に喋らせる権利など無い！」

「チッ・・・煩躁（うぜぇ）」

ボソっと僕は呟く。

僕は怒りを覚えた。

そいつは酷いというか、最低な言いようだ。この人は本当に酷い。

「所詮碌でもない輩だろう！」

ぐはっ！

直球ストレートが、飛んで来た。

「いや、あの、あんたのような碌でもない適当にほざくあんたよりましですよ」

カウンタークロス返し。

「ふん。貴様よりかはましだわ！」

ぐは！

効果なし！

寧ろ自爆！

墓穴掘って自爆！

僕よりましって、正解してる！

結構心にざっくりきた！

「お父さんいい加減にしてよ！」

「止めるなこなた！お前の敵は俺が倒してくれる」

「・・・・・・・・・・・・・・」

じゃあ、手前は何者だ！怪物か！？

なんだか、正直帰りたい。疲れた。

この人すげえうるせえ。しかも、鬱陶しい。

いや、もうプレゼントだけ渡して帰っていいかな？

世界が平和では無いし、上手く行かないって普通で当たり前だなぁ。

「お父さんウザイ」

ひゅん　ざく　ビシィッ　がらがらがら

こなたの言葉で、泉父は完全に石化して内心崩壊した。

白化するように、真っ白になった。それは目の錯覚かもしれない。

毒舌というか止めというか、必殺の一撃というか・・・子を思う親に対して最高の止めだった。

こなたも酷ぇ・・・

でもすげえ。

親に容赦ねえ。無駄に格好いい。でも、ある意味ではしょぼい。

こうして僕は何とか泉家に泉父の攻撃で怪我を負わずに這入る事が出来た。

どうも、こなたの部屋は二階らしく階段をのぼり、部屋まで向かった。

僕は、「あー、結構大きいなこの家」などとほざきながら、廊下を進んだ。

そして、一つのドアの前にとまるとノブに手を掛け

「どうぞー」

といいつつ、部屋を空けた。

「うわ！」

僕が先人として入り、その部屋の光景にドン引きした。

何から何まで、趣味と言う名の漬物に入れられたような、空間だった。

「予想通りの凄い部屋ね・・・」

かがみの言葉に、僕は同感した。

部屋の中心には、テーブルがありケーキがあり、コップが並んでいる。

その他部屋の殆どの場所に　フィギュア、マンガが殆どで、棚の１０分の８を占めていた。

教科書類は一体何処に存在しているのだろうか？

若しかしたら、置き勉なのだろうか？

いや、こいつの場合置き勉だ。

「あー、座って座ってー」

こなたに軽快にそう言われて、僕は座れる場所に腰を下ろした。

他の４人も座る。

その間にこなたはコップにジュースを注いでくれた。

因みにコーラである。

製造方法と原液が不明で極秘されているっぽい、不可思議で危ういの飲み物である。

その事は前々から噂で聞いていたけれど、特に調べる気もなかったので、放っておいている。

僕は嫌いでは無いけれど、好きなほうでもない。

どっちかといえば嫌いである。気分的に・・・

それぞれ僕らは歳を取る為の儀式である蝋燭に火をつけ、部屋を暗くした。

ケーキの上で妖しく揺らめき光り橙色の熱の灯火は、17本分もあり結構な明かりだった。

故に熱い。

そしてこなたがそれを吹き消す。周りは闇に覆われる。

蝋燭が吹き消えた匂いが鼻の鼻腔をついた。

うーん。

なんだか高校生としてこの儀式（蝋燭を吹き消す事）はギリギリなのか、それとも当たり前なのかイマイチ解らなかった。

非常に微妙且つ中途半端だ。

それよりも、今年１７歳になるこなたを見て、僕はなんだか小学生の誕生日に付き添われた高校生のような気分だった。

なにより、彼女は小さいので小学生と言われてもおかしくはないし、あの矮躯を見るとなー・・・と思う。

ここの１ヶ月間で慣れてしまっているわけではなかった。いまだに違和感と抵抗感があったりする。

だからこなたの姿を前々から思っていたことと何ら変わらない。

勿論、かがみ、つかさ、みゆきの印象も変わっていない。

彼女を高校生というキーワードを当て嵌めるのは、見知らぬ人間から見たら無理な話で、小学生というキーワードを嵌めるのが、当たり前だ。あの身長をどう見たら高校生に見えるのか知りたいものだった。

絶対こなたが１７歳で高校生という部類（ピース）に入る訳がない。

「嘉音君」

その声に思考が止まった。一時停止した。吃驚したわけではない。

止めたのだ。

「いま、物凄く失礼なこと考えなかった？」

考えていたことを的中された。いろんなところで鋭いなこの矮躯。

「別に・・・なんだか変な気分だし・・・壁やそこらに置いてある未確認不明物体が、気に成って仕方なくってさ。何でこんな物に熱中できるのか考えてた」

完全嘘を吐かす僕。

実は言うと僕は嘘吐きで、人を貶めるのが得意である。人間なんて簡単に壊れるし、脆いしね。

特に嘘を吐くのが得意だ。

そんなわけで、誕生日は始まった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ふふん、また私の勝ちだね」

「くっそー、悔しいわね」

「お姉ちゃん頑張って～」

というわけで、5時間ほど経過し、現在午後6時後半。夕焼け半分。

その間何をしていたかと言えば、アニメの映画を見たり、ゲームしたりと、普通なのかもしれない『有り触れた』ことをやっていた（

途中復活した泉父に、攻撃を受けたが乾坤一擲の理論（暴言）で撃破した。因みに現在は精神回復中（メンテナンス）している）。

僕の場合、それを普通に傍観していた。

混ざる余地というか場所もなかったので、まあ僕的には傍観が一番だろうと思い、そうしていた。

まあ、混ざったところで僕は何を言って何を行動すればいいのか、解るはずもないし、実際ゲームという類を、試してやってみたこともないし、面白くなさそうだ。

傍観してて誘われたけれど、何時もの癖？なのか、拒否した。

んで現在。何のゲームかわからないが、プレイステーション2でこなたとかがみは格闘ゲームをしていて、こなたが圧勝している。

画面には筋肉隆々の筋肉ジジイとチャイナ服を着た髪型が団子頭の少女が戦闘し終わっていたのが映っていた。

なんだか、二次元だからいいけど・・・リアルだったら、筋肉ジジイとチャイナの少女が戦ったら少女が一発で、潰されそうだ。

あー、でも、技という方面ではジジイの方が死ぬ気がする。

みかこさんと、手合わせしたとき、技量という形で負けたからなぁ・・・力が強いの僕のほうなんだけど・・・

「そういえば最近鍛錬していないよなぁ」

最近会ってもいないし・・・また旅行にでも行ったかな？

「？どうかされたんですか？」

「んにゃ。なんでもない。ただの独り言・・・」

僕はそう言って、再び時計を見る。

「あ、こんな時間か・・・」

もうすぐ七時になりそうなことに僕は気が付く。序に腹が減っている事にも気がつく。

ケーキとかお菓子とかは食べたけれど、僕はそこまで食べては居ないので、結構お腹は減っている。

「本当ですね。私もそろそろ帰らないと、門限を過ぎてしまいます」

「じゃあ、今日はここでお開きにしたらいいんじゃねえの？僕もそろそろ家に帰って家事とかしないといけないし・・・」

腹減ったし・・・

「じゃあ、お開きする？」

「そうしよっか」

ゲーム（かがみが再び敗退していた）をしていた二人もその言葉に答え、コントローラーを置く。

てなわけで、僕らは持ってきた荷物を纏め、部屋を出て玄関までむかう。

どうやら敵はもう登場しないようだ。嬉しいなあ・・・

玄関で靴を履き、かがみが先頭で玄関から出てゆく。

「あれ？」

玄関の外まで来たところで、足を止め、僕は記憶の隅に消しかけてた、ある事を思い出し鞄を弄(まさぐ)った。

取り出したのは、小さな袋。昨日買ったブレスレッド。

「ほれ」

僕はそう言って、振り向き様にそれを差し出した。

「え？なに？」

「見りゃ分かんだろ。定番のブツだ」

「え？何々！？何もしかして、プレゼント！？嘉音君が？私に！？」

「・・・・・・いらねえのか？」

「お～」

そう言って彼女は勝手に僕の手からそれをかっぱらう。

「別に中に変なものって入ってないよねえ？」

「はいってねえよ」

「そう。じゃあ、これは貰っておくよー」

「ああ、じゃあな」

「じゃあね」

僕は踵を返して、歩み始める。

「あ、嘉音君」
「んー？」
僕は振り向かない。
「ありがとう」
そう言って玄関が閉められた。
「・・・・・・・・」
変な気持ちが頭を一瞬巡って出て行った。
随分と冷めた終わり方だ。と思う。まあでも、所詮こんなものだろう。
世の中、好い事なんて単純しかない。
希望するだけ面倒だ。
「なにしてたのよ？」
「別に・・・」
かがみに問われて、僕は素っ気無く答える。
「どうでもいい話を少ししただけだ」
けして僕はプレゼントを渡したとは言わなかった。
言いたくなくは無いが、面倒は嫌いだ。

その後駅まで僕らは歩いた。会話をしたけど、短いだけだった。他愛もなければ、感情もない。決められた言葉を言うだけだ。

それでもいい。

普通が続くというのなら。普通が続くのなら。

そのほうがいい。

電車に乗って僕は帰り、彼女たちも電車に乗って帰る。

かがみたちとは途中で別れ、みゆきと二人きりになる。

会話は無い。

夜の風景は、ここでは暗く、民家から出る光だけが醜く光っているのが分かる。それを電車の窓から覗く。

その風景を僕は見て彼女の先ほどの言葉を思い出す。

【ありがとう】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「訳解んねぇな・・・」

呟く。あまり、ぎこちない変な気持ちで・・・

六話（後書き）

変な終わり方ですいません。

次の更新は未定です。

漆話（前書き）

かなり投稿が遅くなってしまいました。すみません。
読んでいただけると幸いです。

漆話

僕の内心ではこういう名台詞が存在する。

【面倒が面倒なら面倒は面倒であり面倒でしかないのだが面倒はどうにも成らなくて纏めてしまえば面倒である】

さて

意外にも僕の人生における邪魔な損害物は身近に存在するものだ。それは勿論勝手な判断ではなく、一瞬にして考え付いたことでもなく、いえば『そう感じた』だ。

僕で言う、違う言い方をすれば【面倒な事】に変換が出来る。

例えば、1ヶ月近く前。僕が友達の家に誕生祝に行った時、そこであった父親がそれに当たる。

いや、実際邪魔というよりも、鬱陶しい程度だったりする。

ロリコンというのだろうか？僕の解釈にしてはそれが丁度いいのだが、世界から見ればあやがち違う視点なのかもしれない。

勿論ロリコンというのは、泉父だ（あれ以来。僕は結構引き摺っている）。

たかが、誕生日で来ただけなのに、殴りかかってきた。

ただの馬鹿だろ。と正面から堂々とはっきり言ってやりたい。

他にも一応邪魔な人物は存在する。が泉父ほど馬鹿野郎でもない。
ましてや天才でもないのだが、とりあえず邪魔であることは間違いない。
まあ、話して得する存在でもないので、ここは伏せておくとしよう。
そして邪魔者というのは人間だけではない。
現在六月二十六日。
カレンダーは既に二枚剥がれ、６の数字を表わしている。
時期には梅雨というものが存在する。
湿りうざったい気候が続き、家中にカビが出来る唯一の時期でもある。
そして、洗濯物が乾かず、太陽の恵みもない時期であり、僕が苛々する時期でもある。
更に言えば、この時期滅茶苦茶しっちゃかめっちゃかにざわざわむかむか鬱陶しい【面倒】なことが一杯あり、ごちゃごちゃしている。
そのため、この時期は『不幸期』と僕は改名付けた。
去年も不良に沢山絡まれたり、喧嘩したり、雨でずぶ濡れになったりで忙しかった。
今日も梅雨（ばいう）は振り続けている。更に言えば土砂降りである。
もっと言えばこの中を歩いて登校である。

「だっり」

僕は、早速目覚まし時計にたたき起こされたところで、一言呟いた。

やけに体が重い。熱でもあるみたいだ。

だが、額に手を当てても熱は無いようで、これは風邪ではないようだ。

むしろ、疲れているような気分だ。

体調不良なのか、一ヶ月遅れの五月病なのか、兎に角だるい。

髪をくしゃくしゃと掻き毟る。

夏ではないので、寝汗を掻いていない。

ただ、室内が湿気っている。異様な匂いがある。

「そういえば僕の髪って結構うざったらしいな・・・」

何時の間に口元まで伸びたのだろうか？

ストレートに伸ばしているとはいえ、特に手入れをしていない。

だが、ぼさぼさというわけでもなければ汚いというわけでもない。

「ま、いっか。切ろうと思えば切れるし・・・」

布団から這い出て立った。

欠伸を掻いて、一先ず背伸びした。

朝の鈍った全身の筋肉が解れていくような感覚を感じながらも、体

のダルさを抜くような感覚も味わう。

そして、何時もどおり朝飯を食い、たぶん今週一杯は雨だろうと思いつつニュースを見て、制服に着替え（制服はもう既に衣替えをしている時期なのだが、僕はいまだに学ランを着込んでいた）、防水対策をした鞄を持って、傘を持って、家を出た。

外は湿った匂いが充満していた。水分を豊富に含んだ空気が、晴れの日と違う空気を表している。

二階から見える景色は、降り注いでくる雨でぼやけて見るのが現状だった。

ここからでも、地面を叩く雨の音は響いている。壁の無い空間から雨が差し込み、地面を濡らしていた。

「・・・・・・」

階段を下りて、傘を差し道に出る。

その瞬間、一瞬にして傘を叩く雨の音は甲高く、故に五月蠅い。

道路のへこんだ部分には、水溜りができ、そこを踏めば多分僕の靴が水で満ちるだろう。

だがそれにお構いなく足を突っ込んでいるのが近所の小学生の馬鹿（見た目）である。

因みに長靴を履いているので濡れてはいない。

僕の場合、長靴など履くべきではない年なのだが、それでも偶にあれを履いて出かけようと思ったりすることがある。

そして今日は手っ取り早く、電車で行くことにした（というよりも

最近は全部電車だ）。

駅までの道筋を思考で考えつつ歩み始める。

アパートを出て数分何事も無く歩き続ける。

雨脚は止むどころかいっそう強く降ってきているような気がしてならなかった。

傘を叩く雨の音がそこまで気を際立たせる様にしか思えないかもしれないけれども・・・・

そんな、考えに浸りつつ僕は雨の中を進み続ける。

既に、靴は濡れていないが、脛辺りはずぶぬれだった。肩から提げている鞄は防水効果のおかげか濡れていない。

「手が冷たい・・・・」

雨に長時間晒しては居ないものの、やはり冷える。

思いつつ一歩踏み出す。

「君」

と

後ろから声がした。

一歩踏み終わったところで僕は歩みをやめた。

声は・・・微かにしか聞こえなかった。

それは雨が振る音が響いていたからだ。

僕は何となく聞こえたような気がして・・・振り向いた。

その微かな壊れそうな声を聞いて・・・振り向いた。

そこに、変な奴が居た。とんでもなく変人に僕は見えた。また去年みたいに　面倒その壹か　と考えた。

夏でもない、ましてや日差しが強いわけでもない、雨なのにサングラスを何故掛けていた。おかげで目が読めない。

表情は無表情で、明らかに一般人らしい。そして、黒髪が整っており、いかにも秘書とかに似ていそうだった。

黒いスーツに身を包んだ、男性だった。傘をさしておらずずぶ濡れ状態。

首には、だらけたネクタイが絞めてあり、中にはカッターシャツを着ていた。

身長は百八十六ｃｍくらい・・・

「・・・・・・」

僕は無言で男性を見る。

睨むようにしてみる。

「君は・・・陵桜学園の人間カ？」

機会音が入り混じったような声。だと僕は思ったが、それは雨足の音で途切れ途切れで聞こえたからそんな声になったのだ。

「・・・・・・」

「聞こえなカったカな？君は陵桜学園の人間カ？」

「・・・・まあ、そうですけど・・・」

僕はぼそぼそと言った。

「そうカ。聞きたい事があって・・・君と同じくらいの年なんだ。『鍵谷（かぎたに）　雅（みやび）』という人間を知らないカ？」

「さあ？僕は記憶力があまりよくないので、憶えていないのかも知れないですけど、因みに身長とかって解りますか？」

何となく僕は訊き返してみた。

無論興味は無いのだけれど・・・・・・・・・・・・・そして、聞いたところで意味もないけれど・・・

それでも、訊かないといけない気がして口を開いた。

質問に応じたのか男性は

「大体君より少し身長が高い。ほんの僅カだけ・・・それに・・・黒髪に前髪で顔が半分隠れていて、それカら後ろ髪が少し長め。それに、特徴としては、化物のような眼差しに黄金のような瞳だ」

「・・・・・・」

そこら辺の凡人世界で見かけるような【人】では無いことが解った。
どうやら、希少生物並みのような輩のようだ。

目が黄金って・・・

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

電車に乗って糟日部駅まで行き、そこからバスに乗って直接陵桜学園へ向かう。
もう道のりもすっかりおなじみの景色だ。
しかし、残念ながらなのか、何時もの風景は望めなかった。
バス内は何時も通り、なんとも五月蠅い空間であり、少しばかりか暖房が効いている。

男女で話す団体や、一人窓際に座り外を見ている者。受験生である3年生が本を読んで勉強していたり・・・

そんな空間に僕は隔離されている。

「・・・・・・」
僕はふと、何気なく気にかかったような感覚で懐から、くしゃくしゃになった名刺を取り出した。

名刺にはこう書かれている。

【足枷雑技団(あしかせざつぎだん)】。会長：汀(なぎさ)　斎(いつき)　電話番号ーーー

一一一る。

・・・・あの人を見る限り・・・・なんだかなあ。

ていうか、まず名前から変だよなあ。なんだよ足枷って・・・・拘束具の一種の名前じゃねえか。

物凄くやべえ気がしてきた。

なんか嫌な予感がするのは気のせいにはならないようだ。

はあ・・・　面倒その貳　か。

とまあ、そんなふうに、僕が考え事をしているうちに何時の間にか陵桜学園に到着を果たしていた。

ふと窓の外を見た。

土砂降り状態は未だに続いており、天井から響く音も絶え間がない。

その後バスが停留所に到着し、僕はバスを出て、急ぎ足で教室まで向かう。

昇降口を通り過ぎて、二階へ階段を上り、一直線に教室へ向かう。

自分の席に座って、鞄から用具を取り出して机に仕舞う。

そして僕の気分関係なく、彼女(ともだち)が来る。

「おはよ〜、嘉音君」

「うぃ」

「おはようございます。神沢さん」

「うい」

まずは挨拶を交わした。そこで違和感を感じる。

「あれ？何時ものちいさいのは？」

何時もながらの【通称：自慢げな人間】が見当たらないことに僕は気がつく。

こうなると、多分あれだ。

寝坊して鬼神先生（くろいせんせい）に拳骨を喰らう展開だな（因みに最近聞こえ話で知ったのだけれど先生は孤独な独身だった）。

このような展開はこなたの奴にしては珍しくもない。

あいつは夜遅くまでネトゲをしているのだ。

無論。やってるからには寝る時間が数時間しかない上に、朝起きるのはもはや遅刻を覚悟しているといえるだろう。

はっきり僕は、こなたにこういいたい。

「外へ出て遊べ。怠け者」と。

家に篭りっぱなしで、しかも運動が得意とはいえ殆どせず、家でＰＣ弄っているようではまるで引きこもりの高校生だ。

そして、毎日3食が毎日のようにインスタントか冷凍食品類・・・・・

いやないか・・・流石に・・・料理も作っているだろうし・・・・

でも、だからこそ僕は思う。

こいつは身長(せ)が伸びないのだと・・・

たしか、幾らか前に誰かから聞いたのだが、人間の成長は１１時から１時の間がいいらしい。
成長ホルモンがよりよく睡眠時に分泌されるようだからだ。

こなたの背が伸びないのは生活習慣が関わっているに違いないと僕は見ている。遺伝子レベルで定まっているのかもしれないけれども、やはり、ネトゲが一番駄目だろうな。

見るからに、１時以降も起きていそうだ。

纏めると【深夜アニメ。ネトゲ。＝背の伸びない原因】になる。

つーか、そんなこと大人になってからでもできるだろう。何でそうしないのか、訊きたい。
青春だってしてねェじゃん。あいつ・・・

あ、でも、僕が言う台詞でもないのかもしれないな。僕だってそこまで身長は高くないし・・・・・

「こなちゃんなら、遅刻じゃないかな～」
つかさが一言言う。

「やっぱりな」
僕も一言言う。

既に登校時刻を過ぎている。遅刻は確実に違いない。

まあ、何時も通りに頭に拳を叩き込まれるだろうな。と僕は、普通

に日常的に思っていた。

何時も通りだし。

変なことは無いし。変化は無いし。非常もなければ異常もない。

「ほな、皆席付けやー」

入ってくるなり黒井先生は、そんなことを言う。

無論僕は席に座っているので動く必要は無い。

その後、HR（ホームルーム）、出席を取るのだが、僕は思いの他、呆けていた。

今日は何をして過ごすかなどを考えれば、今日はかなり退屈な日だが、まあ退屈が嫌いじゃない僕に限れば別にいいか。

「泉ー。お？泉は休みかいな？神沢ー、泉知らんか？」

「ん？」

あれ？気のせいか？一瞬僕の苗字が先生の口から発射されたような・・・・

「おーい、神沢ー」

やっぱり、山彦が聞こえるような気がする。でも、聞こえそうで聞こえなさそうなことは無視するに限る。

世の中には聞いて良かったことと良くなかった事は、区別すべきだ。

特に、僕の周りの一部の人間がそれに当たる。

「かーみーざーわー」

どうやら見逃してくれないようだ。

聞こえていたけどさあ・・・・

「はい？」

「泉知らんか？」

「はあ？」

とっさの質問に声が裏返る。

何で僕が奴のことを知らないといけない？この人は阿呆か？馬鹿か？間抜けか？その三択全部が当て嵌まるような人間か？

何を根拠に他人のことを僕に話すのだ？

「センセー、意味が分かりません。何で僕があの【青色】の事を知らなければならないんですか？」

「よく話しとるやろ」

だからって僕に訊くなよ。

「それって寧ろ柊とかに訊いたらいいじゃないですか？ていうか、話しているからといってなんで僕を指定するんですか？」

「そうしてみるのも面白そうやと思ってな」

その言葉に、素直に腹が立った。

「面白い！？意味が解んねぇよ！そんなことを考えるなんて先生廃人ですか！？」

「す、少し言い過ぎとちゃうか？」
「大体、僕をノリのいい生徒に見てんじゃねえよ！アホか！ボケェ！いい気になってんじゃねえよ！」
暴言を僕は散弾のように撒き散らす。
僕はあんまり怒らないし、クラスでは影が薄いし、本を読んでいそうな（本が友達のような）、物静かなクラスメイトである。
一応これが僕の一番定置しやすい、定義でポジションである。
僕は最近、機械の感情表現の実験みたいに、僕がどんな発言をするか『試される』ということもあり、今の先生の発言には憎悪があった。
なので、ああいう発言に僕は渾身の暴言を持って撃破に挑んでいた。
「でも、突っ込みはいいよなあ」
どこかのクラスメイトに、言われた。
ここ数ヶ月。そう言われる様になっている。
どうやら段々僕のポジションは突っ込み役とボケ役のどちらかに転びそうだという案が出ているらしい。
案と言うより、キャラ設定と言うか・・・・
「ところで先生」
「な、なんや神沢」
先ほどの暴言戦争により、一旦先生から僕への好奇心は撃破され、先生は現在少し引き気味であった。

「こなたはたぶん遅刻だと思うんですけど、それはいいとして一言言わせてください」
「？」
この言葉は、僕から先生への必殺技である。
「独身から脱出するの頑張ってください」
白のチョークが投擲された。
僕はそれを指を綺麗に弾いて砕く。
「もういっぺん言って見いや？次は、ぶっ飛ばすでー？」
結構な怒りが篭った表情で言われた。かなり顔が引きつっている。
火に油を注いだ気分だ。
でもまあ、ご自由に。と言いたい所だ。
というよりも先生の腕力で人間をぶっ飛ばせることが可能だろうか？と僕が考えを思考し始めた
そんな最中・・・・
「セーフ！」
そう言って前のドアから入ってきたのは、【青色（いずみこなた）】だった。
しかも、セーフ！　とかいっているが、完全にアウトであるのは言

うまでもない。

クラスメイトの視線が一気に集まり、その後の傾向を見る。

・

・・・・

「これで少しは懲りたやろ」

遅刻したこなたは先生の前へ来ると同時に、説得と言うより言い訳と言う名の説得を交わしたのだが呆気なく嘘として見抜かれ、撃沈させられた。

現在こなたの頭には陥没するほど強烈な拳が炸裂した後、後遺症で鋭い痛みが残っているだろう。

たぶんそれで、火花のようなものが頭の中を容赦なく駆け巡っているはずだ。

「馬鹿だろ」

そう僕は呟く。

今回ばかりに限って僕はこの言葉を言うわけではない。

いつもである。それも遅刻するたびにである。

ズボラのような僕が言うのもなんだが・・・・少しは遅刻しないようにしろよ・・・五月頃だってそうだったじゃねえか。

→

まあ、僕の内心での思いだし、直接いわなければ意味が無いか・・・・・・・・言う気もないけど。

そんな訳で、先生が独身を脱出しようが、こなたの頭から生えている癖毛もろとも陥没しようが、僕のポジションがボケか突っ込みになろうが、こなたが馬鹿であろうが、このクラスの全員が僕の噂をしたてようが、この世が全面核戦争勃発になろうが、百歩・・・・いや、十兆七百億五百六十七万五千七百五十歩譲って如何でも良いとしよう。

さて、今日が如何なる状況であれどんな場所に成り立とうとも、普通に過ごすとしよう。

普通であれ不通であれ、非常であれ非情であれ、日常であれ日情であれ、僕にとって変化がある一日に成りそうでは無いな。

そう思いたい。

【嫌な予感】　と言う感覚もあるけど、僕の状況上では気のせいだろう。

感情のないような人形(もの)のように、冷たく僕は自分を貫けばいいか。

この時期は朝と思った同様。面倒なことになるのは完全に間違いでは無いけれど、今日はそんなことにならないといいなあ。と僕は楽観的に思った。

だけどそれは――――――

「皆せきついてー」

ーーー

「とりあえず、お前がネトゲで楽しく意気揚々にこの世界を満喫しているならそれでいいさ。精々僕の関係のないところで生きてくれ」

と、僕は言って背伸びした。特に感覚は無い。

「そうそう、嘉音君あのさ、昨日ね――――――――――――――――――――」

再びこなたが僕にとって不利益で、鬱陶しい呆れた馬鹿げた話を開始した。だから僕は聞き流す。

しかし、退屈だ。

初めはこなたと話していれば楽しいことや退屈はしないと思っていたが、呆れる話を続けて聞いていれば、退屈が帰ってくるようになった。

最終手段の窓の外を見ても、いい風景は望めない。こんな湿気る季節が一番面倒で退屈が多い。

勿論だるい。

何をしなくても窓の外に流れる水たちが異常に鬱陶しく思えてしかたない。

これが、不通の学園生活なのだろうか？そうなると僕は劣っているか欠けている奴だ。

だから僕は【欠陥感情】なのだろうか？

自分を整理すれば出て来る言葉は下向き。

一言で言えば【記憶喪失障害者】。
ただそれだけなのに、僕はこんな成りだ。
人の事がどうでもいいように思える。何もかもどうでもいい風に見えてくる。

だけど、それも有りなんじゃないか？　って思うときはある。
人の感情が分からないだろうが、人が苦しんで死ぬのをみようが、悲しむだろうが、僕にとってはどうでもいい。
僕は僕でいい。
僕の物語（はなし）で僕の噺（はなし）だ。
僕は壊れている。

とまあ、退屈と言っても・・・嫌いじゃないし。

「嘉音君？聞いてる？」
「聞きたくないから聞いてない」
先ほどから1分程度こいつ話していたが、僕は聞き流していた。
勿論考え事の所為でもあるけれど・・・・・
「えーっっ！！折角説明していたのにー」
「じゃあ、簡単にまとめて話せばいいだろ」
「はあ、全くもう・・・・」

こなたは呆れ顔状態で再び口を開いて僕に説明する。

「今日、転校生が来るって事知ってた？」

多分それは、その言葉を聞いて僕は・・・

転校生が必ずいい輩ではないことは、予想すべき範囲なのだが期待をしている輩はそんなことは眼中にもないだろう。

ともあれ。

来たら来たで考えれば何ら問題は無い。そのときそのときで対策を考えればいい。

臨機応変。

「季節外れに転校生とは・・・・・・・・・・・・・何か嫌なことがおきそうだ。

現在クラスは、意気衝天状態。

僕は、意気消沈状態。

転校生なんてどうでもいい。

「ほな、皆席着けー」

前のドアが開きそこから、黒井先生と一人の生徒が入ってきた。

「（あ、この転校生やばいわ・・・・・）」

転校生が入ってきて早々だが、僕は見た目でそう思った。

見た目的に身長は百六十八ｃｍ位、黒髪で顔が半分隠れている。

夏服なので、袖から伸びる腕は、筋肉が張った中筋と言うべき体躯だった。それに少し長くみえる。

そして、クラスがざわついた。

何にざわついていると言えば勿論転校生なのだが、詳しく話せば簡単だった。

【化物】のような突き刺すような鋭く尖ったような【眼差し】。【黄金】の【瞳】。

それが原因だ。

見るだけで分かる。

転校生から向けられる眼光は、鋭さを持ち、突き刺さってくる。

それが、ざわつきの根本的原因だった。

「こいつが噂の転校生や。皆仲良くしてやってや。ほな、自己紹介し」

「初めまして、【鍵谷（かぎたに）　雅（みやび）】です。宜しくお願いします」

意外にも朗らかな態度と物腰とその声に教室が安堵した。

それよりも、僕は名前に違和感を持った。

鍵谷　雅？

何処かで聞いたような気がする・・・・・・な。

でも、思い出せないし、これは果たしてデジャビュなのか？

いや、そうでもなさそうな気がする。

「じゃあ、鍵谷。神沢の隣に座りや」

「えっと・・・・誰でしょうか？」

「あいつやあいつ。あの精気が抜けた人形ような奴や」
「そう、いわれても・・・・」
「おい、神沢ー」
→
（僕には全部聞こえていない）

【鍵谷雅】・・・・誰が言っていたっけ？なんか思い出せない境界線にあるような気がする。

でも、思い出したら面倒なことになりそうな・・・・予感がする。面倒は嫌いだしなあ。いっその事ひっくるめて記憶の片隅に棄ててもいいか。

「おーい、かーみーざーわー」
「ん？」

何時の間にか僕の名が呼ばれていた。
しかし、今日はよく自分の名前が呼ばれるなあ・・・・

「なんですか？」
「ほれ、鍵谷あいつが神沢や。見るまでもなく人形やろ？」
「・・・・・・」

面倒その肆　が発生した。

どうやら、何時の間にか僕のイメージ図は【人形（モノ）】に成り下がっているようだ。
僕が何をしたと言うのだ。

少し僕は怒りを覚え応対した。

「で？何ですか？生理痛さん」

教科書が僕の額に炸裂した。それが宙を舞って落ちて行く。

「何するんですか？」

特に何もなかったように僕は教科書を拾いながら答える。

「愛の鞭や」

そういわれ僕は投げられた教科書を投げ返し、先生の鼻に激突させた。

「ぐへぇっ」

女性らしくもない見っとも無い声で先生は声を上げる。

結構いい音はならなかったので代わりに嫌な音だけが響いた。

「何すんや！」

先生が鼻を押さえて怒鳴って僕に訊く。

「邪悪な鞭です」

「愛じゃ無いんかいっっ！！！」

・　・　・

・

まあ、そんなこんなで、僕と黒井先生の戦争が終了し、鍵谷が僕の隣に座ることとなった。
何故僕の隣なのか、さっぱり分からないがそれでも、うんいいかと考えた。

丁度席が空いていたし・・・・

「鍵谷。分からんことがあったら、高良に訊いてや。うちより高良の方が適任やからな。それと神沢。いつか覚悟せえや」
「嫌です」

こうして僕と黒い先生の口喧嘩は終了しその後は完全に自習になった。多分これで面倒其の肆が消えるといいなあ。
でも、あの先生(ひと)結構しつこそうだ・・・・

ところで、何故自習かといえば先生たちの緊急会議に加え、大事な書類を整理する為2時限そこらの時間が空くことになり、先生は残らず職員室および会議室に集合することとなる。

無論教室は『やかましい』の五文字の渦に閉じ込められる。

自習なんて先生もいないのだから、しない方がましだ。というより、やってもやらなくてもこの騒ぎの中では無意味に違いない。

と、ほぼ全員が思っているはずだ。
私立校だからといって規律正しくと言う効果は、生徒の前では一切切り捨てられている。

席を立って話している奴がいてもまるでおかしくは無い。

因みに・・・・・・・

「なあ、鍵谷？お前前は何処の中学だったんだ？」

「鍵谷君って、彼女とかいたの？」

「鍵谷、お前って文化部か？それとも運動部に入っていたのか？」

僕の隣では現在集団が集まり、鍵谷雅に対して質問地獄が渦を巻いており、僕の耳に届く五月蠅い話し声は止む余地もなかった。

別にいいのだが、僕にとっては一応迷惑でもないけれど、それにしたって群がりすぎだ。

「一旦離れるか・・・・」

僕は席を立ち、自習だと言うのに教室を出る。五月蠅い教室を後にして、僕は屋上に向かう。

無論他の教室も五月蠅い空気で溢れている。

【私立陵桜学園高等部】。略称名【陵桜学園】。

マンモス校。と初め入った時はすぐにそう思った。

一学年１３クラス。馬鹿みたいな人数だった。

私立の癖にしては、かなりの受験者がいるようで、その数は６００も下らないだろう。

僕らの学年のクラスは大体一クラス約４０人。４０×１３で５２０人。６００人受験者いてもおかしくは無いし、若しかしたら１０００人もいたかもしれない。

僕はそのうちのたった一人でしかない。

屋上の目の前に着たとき僕はドアノブに触ったとき思い出す。

「そういえば、今日は雨だったな」

ドアノブの冷たさで思い出し、僕はドアノブを離し下がって階段に座る。

屋上にいけないんじゃ、気分も解消しないな。

「はぁ」

座りながら溜息を吐く。

退屈ーーー

なって、こんな風な奴になったのだろう。

こういう輩が、こういう学校にムカついて、一々喧嘩を売りに来る奴もいつか見たことがある。

「・・・・・・・・・・・・」

無言で立ち上がり、僕は奴を見た。

「今ヨォ俺は機嫌が悪ィんだ？解消の為殴らせてくれネェ？」

階段を一段一段踏みながら奴は上ってくる。

「理不尽な・・・・」

呆れるように僕は呟いた。

僕は、どうやら【不幸期】と言うものを、改めて知る必要があるようだ。

漆話（後書き）

ちょっとした長編を書いてみようと思います。
受験も終わったので、少しでも早く投稿出来るようにしますので、
楽しみに、もしくは適当に待っていてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9286n/

らき☆すた　～変わった僕の日常～

2011年4月19日01時03分発行